

「えっ!? まだ10年?」

— 患者会運動の歩み —



ほっとスペース八王子

「えっ!? まだ10年?」

－ 患者会運動の歩み －

「ほっとスペース八王子」の合言葉

- 一、頑張らないこと
- 二、あわてず、あせらず、のんびりと
- 三、他人のペースに惑わされず
- 四、排除でなく、配慮を
- 五、みんなで考え、みんなで行動

は じ め に



ほっとスペース八王子 代表 堀 部 正

29年前に八王子の駒木野病院の心理室長・佐藤和喜雄氏の手で「八王子・赤堀さんと共に闘う会」が結成されましたが、その仲間を中心に「ほっとスペース八王子」が設立されました。地域の「精神病患者」の課題を取り組み始めて10年。あっという間の10年でした。

「精神障害者」差別による冤罪で死刑囚となった赤堀政夫氏を4度の再審請求の末、ついに無実で取り戻すまでの闘いの中で、「八王子・赤堀さんと共に闘う会」の仲間は地域で苦しみ、悩んでいる『精神病患者』の取り組みの必要性を感じていました。そこで多田氏、大根田氏と共に心の病の苦しみと辛さを一番知っている「精神病患者」自身の手で活動を進めようとしてきました。その後合流した仲田氏と議論の末、行政からの助成金を受けながら運動を進めようということになりました。

しかし、「ほっとスペース八王子」という形で行政から助成金を受けながら活動始める最初から関門がありました。「精神病患者」当事者が運営するという初ケースに行政から門前払いされました。開設一年目は賛助会からの寄付、借金でなんとか自己資金を募り、それで運営を始めました。一年の実績で遂に東京都と八王子市は「ほっとスペース八王子」に助成することを決めましたが、この影には当時八王子市議会議員だった大日向宏氏の力添えは大きなものがあったと思います。

自己資金で運営し、運営委員として共に運営に関わった「精神病患者」仲間の開設時のエネルギーは本当に大変なものでありました。今は亡き乙津(坂口)菊江さん、篠岡明子さん、そして闘う会からの仲間の平野博之さん、「ほっとスペース八王子」が開設する直前に突然死された政田さん。大きな夢を実現しようとしたけれども、貴重な仲間の命がこの10年の中で志半ばで失われていきました。

この10年で実現できたのは「たまり場」「ひとり暮らしが出来る仲間を増やす」ことだけでした。

いわば社会を「精神病患者」に適応させるためにこの10年は嫌々ながら社会に適応してきたようなものです。そして次の10年はいよいよ「社会を『精神病患者』の在り方に適応させる」という壮大な夢の実現です。そのためには当然、いままで以上に外に向けて働きかけていく必要があります。並大抵のことでは乗り越えることが出来ないような厳しい試練が待ち受けています。共に進みましょう！

目 次

「えっ!? まだ10年?」

－ 患者会運動の歩み －

◎ はじめに 堀部 正

◎ ほっとスペース八王子へのメッセージ

- 「ほっとスペース八王子」を支えた方々 5
佐藤和喜雄／大日向宏／松本文夫
- 全国の闘う仲間たち 8
前進友の会／神奈川赤堀さんと共に闘う会／まよなかしんや／藤岡一昭
玉川洋次／田中康宏
- 医療の現場から 14
船津邦比古
- 作業所で頑張る仲間・先輩の方々 16
刈田靖史／脇田泰行／小林 誉／斉藤隆生／土居幸仁／樋口徹郎
山本 誠／田中直樹／磯田重行／伊藤知之／執行裕二／クッキングハウス
- ソフトバレーボールを通じての交流 28
瀬川聖美／ドドンパ荻窪一同／白倉悦子
- 「ほっとスペース八王子」に携わった仲間たち 30
村里季巳江／宮田陽子／鈴木功一／桜井悦子／原田俊平／伊藤喜久夫
真壁里実／古屋真理／内藤真也／はるこ／阿部健二／橋本明子
林 みち／林せつ子／土橋幸一／植松恵樹／宮島正子／岡口雅子
- 現職員の立場から 52
堀部 正／井田有哉／浜 光宏
- ほっとスペース八王子「家族会」の結成を 59

◎ 会 則 60

◎ 年 表 64

◎ あとがき 堀部 正 69

◎ 編集後記 植松恵樹／浜 光宏／井田有哉 70

◎ 「ほっとスペース八王子」へのメッセージ ◎

「ほっとスペース八王子」を支えた方々

自己と社会の両輪に働きかける



福祉会菩提樹理事長・元八王子赤堀さんと闘う会代表 佐 藤 和喜雄

「ほっとスペース八王子」の設立十周年、まことにおめでとうございます。そのニュース「ほっと」は既に100号を越え、この原稿を書いている間に103号が届きました。普段は申し訳ないことに、ニュースをぱらぱらとめくるだけしかできていないのですが、この際、100-101合併号～103号の3冊を読ませていただきました。特に「100号記念特集：バックナンバーを読んで」では、会員メンバーの皆さんが心に残った記事を紹介しながらコメントされているので、さながら100号分のエッセンスを読ませていただいたような豊かな気持ちになりました。毎月24頁もあるニュースを多数のメンバーの筆によって発行されるのですから、活動ぶりの幅広さと深さがよく分かります。原稿書き全ての作業工程を全員の「仕事」とする体制が出来ているようで、よくここまでと、ほんとうに感服の至りです。

（「ほっとスペース八王子」は、「病者」が主体となって運営している作業所で

す。常勤職員3名のうち2名が「病者」であり、また、「ほっとスペース八王子」の運営に関わることのすべては、毎日行なわれている全体ミーティングと、年1回の総会で決められます。「病者」が自己解放センターとしてうちたてた空間、それが「ほっとスペース八王子です。」（「ほっと」52号、ゆうさん記事）

これはすごいことですが、日本の作業所の半分以上がこのようになるように、世の中が変わらなければならないのでしょうね。私は普通の作業所規模で4名は職員が必要であり、「病者」2、「健常者」2の職員配置ができるくらい、行政は補助金を出すべきだと思っています。「ほっとスペース八王子」ではメンバー全員が大活躍の様子が伝わるのですが、それだけ職員の役割もあると思います。

「ほっと」では上記のように「病者」または「精神病者」という表現がなされています。当事者とかユーザーとか色々な表現が用いられますが、特に「精神病者」と表現するのはカミングアウトしていることだと私は受け取っています。ありのままを自ら受け入れることであり、

実は容易ならぬことです。同時に「」をつけることによって、それは世間と社会体制が偏見と差別をもって呼称するところの「精神病患者」ではなく、真実は、社会状況の中で罹る病気であり、周囲の偏見差別も変わるよう働きかけることによって、ごく当り前の個性ある人間としての存在を回復し、「病気」「闘病」を契機にますます社会的存在として輝くののだよと、自らと周囲に訴えかけて活動している、或いは自然とそうなっているのだと、私には十分思えます。

私は 99 年に、自分の住んでいる岡山県金光町に古い民家を買収して、地域精神保健福祉を担う事業体を設立し、「福祉社会菩提樹」と名づけました。以来 6 年、小規模作業所「ワーク菩提樹」を運営しています。その活動と人間関係模様の当事者中心性と、幅広さ豊かさの点で「ほっとスペース八王子」には遥かに及びませんが、これからも、この地の特性と我々の来歴の特徴を生かして、あるべき姿を追求したいと思っています。

今、世の中は大変な問題に満ちていますね。その中でも障害者自立支援法案は、名称とは裏腹の、政府による管理と利用

者負担を強いる経済政策が露骨に見えているのに、いつ成立するかという緊迫状態です。心神喪失者等医療観察法は既に強行成立し、7 月 15 日施行が決定しました。

こういう危険な管理強化が度合いを強める事態のなかでも、病気・障害を体験している当事者の活動が以前より活発になり、「ほっとスペース八王子」のように、当事者が全て責任をもって運営する事業が行政補助金を得ながら、多くの人々の支援で成立しているのも現代です。このような病気・障害の当事者から学び、「健康者」中心の社会から、どんな病気・障害・社会的困難をかかえた人たちも一人残らず包摂したところに社会そのものが成り立つのだよ、という「インクルージョン」の思想と実践が日本でも芽生えつつあります。「危機は好機と表裏」が世の中であり人生であると、自覚を確かめ確かめしながら、今日一日の元気に感謝しながら 67 歳の今を何とかサヴァイヴしている私です。

ますますお元気で、ちょいと息抜きもしながら、二十周年に向けてさらに発展されることを祈ります。

ほっとスペース開設に思う



「ほっとスペース八王子」が発足して節目の 10 年を迎え

元顧問・元八王子市議 大日向 宏

た。一日一日の積み上げで 3650 日という日数に到達したということになる。関係者のみなさんの並々ならぬ努力のため

ものであり、改めて「おめでとうございます」と申し上げたい。

台町4丁目、西八王子駅にほど近いマンションの一室でスタートし、千人町の一軒屋に移り、さらに現在の甲州街道に面した八幡町のビルへと、移るたびに広いスペースの部屋になった。

現代社会は「スピード重視、能率万能の社会」で、ゆっくりズムとは相反することが多く、人々の心はストレスというおおきな負担をかかえていくことになる。

その負担が大きくなり、精神的に耐えられなくなり、病気につながってしまう。静かな環境、その人なりのペースで動ける環境を自分達の手でつくり、運営していこう、という発想で始めたのが「ほっとスペース八王子」であったと思う。

今から10年前、発足を祝う会が子安町の市民センターで開催され、私も招待されて、次のようなあいさつをしたのを覚えている。

「ほっとスペース八王子、とてもいい



オープニングパーティーでの大日向さん
(1995年5月20日子安市民センター)

ネーミングだと思う。誰でもホッとする場がきわめて少ない。ほっとスペース八王子は、ホッとするたまり場として機能することを願っている。」という主旨のあいさつだったと思う。これからも1日、1日の積み上げで、ゆとりの空間を確保し、時間に追われ、スピードを要求されて苦しむ人々のホッとする場としての役割を果たし続けてほしいと思う。

終わりに、発足当時から先頭に立って行政と折衝を続け、困難を乗り越えて、ほっとスペースを立ち上げた多田さんをはじめとする方々に敬意を表し、今後の更なる発展を希うものである。

何事も無かった様に

支援者 松本文夫

前略

私のマンションの前に夢庵と言う旅荘があります。私の方は思親ハイツと言います。この十年、特に最近は正に夢の中で思いめぐらす日々が続きました。

時代は激しさを増しておりますが、私は孫達と静かに遊んでおります。この静

けさに感謝致しております。

ほっとスペースも何事も無かった様に十周年を迎えた事を心よりお祝い申し上げます。

皆様の御健勝を祈っています。

全国の闘う仲間たち

ほんとスペース八王子のみなさん 10周年に寄せて



前進友の会

みなさん、こんにちは。

長く、病者なかまのセーカツがつづいていく、とても、素晴らしいことだと想います。

多田所長時代に、あの一軒家の時代に、何度かおじゃましたり、ほんとのおみなさんが、アソビに来られたりと、嬉しい想

い出があります。堀部所長に交代してからは、交流がなくなっていますが、それも自然なことだツタかも知れません。だから、また自然な成り行きで交流が復活してもいいのかなと想ったりもしています。

とにもかくにも、キーサンセーカツ、ぼちぼち長く続けていきましょう。

ではまた、再会できるときに。

「精神病患者」の交差点

神奈川赤堀さんと共に闘う会

「ホットペース八王子」は、「精神病患者」の交差点。

様々な「精神病患者」が集い、通り過ぎていきました。

坂口菊江さん（旧姓乙津）からの最期の電話は、

「私、今、私の人生の中で一番幸せなんです！」

そしてその五日後、貴女はこの世を去りました。

神奈川のメンバーも、坂口さんや八王子のメンバーに



差し戻された静岡地裁に再審を始めろ！と要求するデモ
(1996年静岡)

どれだけ勇気をもらい、はげまされてきた事でしょうか。

私達にとって、ますます生きにくく
なっていく世の中で、
「ホットスペース八王子」の活動は一筋

の光です。
これからも地道で息の長いご活躍を。

「ほっとスペース八王子」開所10周年によせて



フォークシンガー まよなかしんや

ハイサイ！ ほっ
とスペース八王子の
皆さん、開所10周
年おめでとうございます。

さて、私と「ほっとスペース八王子」
との出会いは、「オープンスペース街」
の紹介でほっとスペース八王子作業所に
て、皆様とコンサートで交流した時と、
皆様の沖縄の旅をお手伝い（ガイド）を
した時であったと思います。

あれから、数年たちますが毎月のよう
に送られてくる「ほっとスペース八王子」
からのニュースを楽しく読ませていただ
き、皆様の日頃の生活が伝わってきて嬉
しく思います。

ところで、私が精神障害者の自立解放
運動に参加するようになって、まだ10
年にもなりません（反省しています）。

沖縄復帰（1972. 5. 15）の頃から30
数年間、プロのフォークシンガーとして
平和・人権・環境をテーマに劇場・ライ
ブハウス・公民館、小中高大学校・青年会・
婦人会・老人クラブ、集会・デモ、薬害
エイズやハンセン病など、身体・知的障
害者施設などで30年余りコンサート活
動を行なってきましたが、「オープンス

ペース街」と出会うまでは精神障害者の
作業所でコンサートをやったことが一度
ありませんでした。

つまり、私の頭の中には精神障害者は
障害者ではない、障害者とは車イスとか、
目や耳が不自由な人たちであると勝手に
決めていて、精神障害の問題についてコ
ンサートをしようなんて考えていなかっ
たのであります。

私は口先では平和・人権・環境をテー
マに歌うと言いながら、時に人権問題に
関しては、考えが狭くかたよっていた
と反省しています。同時に「オープンス
ペース街」や「ほっとスペース八王子」
と出会ってから、やっと、私の息子と娘
が2人とも中学校時代に登校拒否をした
ことが分かったような気がします。

私は沖縄「復帰」後、一年近く、日本
全国をプロとしてコンサートをして回り
ました。

私が日本（本土）をコンサート活動
して思ったことは、沖縄問題を訴える
ミュージシャンは郷里沖縄で生活しなが
ら演奏活動を行い、日本（本土）へは歌
いたい時（又は声がかかった時）に演奏
旅行をすればいいのだ。日本（本土）に

住みながら、沖縄のことを訴えるコンサートは私にはできないと思い帰沖し、普通の仕事をしながら2足のわらじで、この20数年音楽活動をしてきました。

ところが、1995年の米兵による「少女暴行事件」以後、日本（本土）からのコンサート依頼が多くなり、2足のわらじで仕事と音楽活動が両立できなくなり、思い切って歌1本にしぼって、沖縄の離島はもちろんのこと日本全国各地でコンサートをするようになりました。

そのような流れの中で「オープンスペース街」が経営する居酒屋でアリちゃんやヨッシーたちと一緒にコンサートをやらせてもらいました。その時、私は感動とすごいショックを受けました。つまり、私の人権運動の浅さをまざまざと痛感させられました。心の病と向かい合いながら生きる者たちが、ギターをかき鳴らし「俺たちを薬づけにするな!」「普通の人と何が違うんだ!」「沖縄への基地おしつけ許さんぞ!」などの心の叫びを聴いた時、私は歌のテーマに「共生」をつけ加えることにしました。そして、私が百回歌うより、当事者たちが人前で訴え歌ったりすることが、より多くの人々に障害や病気に対する「偏見」や「差別」をなくし「障害のある人もない人も共に生きる社会」をアピールすることができると決意し、これまで私自身が沖縄の中でやっていなかった活動、つまり、精神障害者の作業所や精神病院でのコンサート活動を通して出会った、当事者の歌う仲間と共に、音楽活動を通した「共生社会づくり」を今、展開中であります。



辺野古の海を守る当事者が運営する「じゅごんの家」前で
(2003年9月29日名護市)

平和と人権と環境をつなぐキーワードは共生です。

平和とは人々が肌の色をこえ、国境をこえ、宗教をこえ、イデオロギーをこえ、互いを認めあい、共生することであると思います。したがって、平和は戦争や抑圧と共生しません。

人権も戦争や差別と共生しません。

子ども、お年寄、女も男も、障害のある人もない人も、共に生きることが人権が輝く社会であると思います。

自然環境も戦争や「開発」とは共生しません。戦争と乱開発は、まさに自然を破壊し障害者をつくり出すものです。断じて戦争と乱開発に反対します。

私に「共生」の大切さを教えてくれたのは「オープンスペース街」や「ほっとスペース八王子」の皆さんです。

私は皆さんとの出会いの中で、50才過ぎてやっと、人間としてフォークシンガーとしていかに生きるかを見つけることができました。本当にありがとうございます。

今、小泉政権は弱者切りすての「障害者自立支援法」という障害者の自立を奪う法（案）を上程し、戦後60年かかっ

て築き上げてきた、日本の障害者福祉を根底からつぶし、憲法9条まで捨てて「戦争国家」化しつつあります。みんなで声を上げ、行動しましょう！

福祉切りすてヤメロ！ 沖縄への新基

地建設ヤメロ！ 米英日軍はイラクから撤退せよ！ 憲法9条ガンバレ！ 障害のある人もない人も、共に生きるユイマール社会を、21世紀の平和な共生世界をめざして前進しましょう！

当事者運動としての「ほっとスペース八王子」の前進に期待する

自治労八王子市職員労働組合 執行委員長 藤 岡 一 昭



「ほっとスペース八王子」の開所10周年、大変おめでとうございます。

開所前の準備期間を含めれば、10数年の関係者の皆様の努力に改めて敬意を表します。

今、日本社会は高度成長期が終焉し、低成長時代を迎え、あわせて少子高齢化が急速に進んでいます。給付が減り、負担が増える時代ともいえますが、こうした時代こそお互いを理解し、分かち合う社会システムの再構築がもとめられています。地方分権や市民協働も、こうした

時代の流れから必然的な目標となっています。

しかし政府は、分かち合いではなく競争原理を強め、勝ち組と負け組の間に大きな壁を作り、「敗者」には自己責任を突きつける政策を進めています。私たちはこうした社会を選択しません。誰もが当事者として主張し、社会全体がそれぞれを認め合うべきと考えております。

大変厳しい時代の中で、当事者運動としての「ほっとスペース八王子」の活動が、こうした社会変革を創り出すことを期待し、10周年のお祝いとさせていただきます。

医療観察法をなくすまで

精神衛生法撤廃連絡会議 玉 川 洋 次

「ほっとスペース八王子」が開設してから、もう10年になるのですね。「八王子・赤堀さんと共に闘う会」がつくられてからだと30年近くになりますね。

この間、職場の問題、生保や年金の問題など、なかまの生活を守る闘いだけでなく、厚生省（今の厚生労働省）や東京都からかけられてきた攻撃に対する闘い

も、たいへんだったと思います。

私は、赤堀さん奪還闘争や処遇困難者専門病棟新設阻止闘争など、「ほっとスペース八王子」のなかまとは、一緒に闘ってきましたが、これからも、ともに闘いぬいていきたいと思っています。

いま、自立支援法の攻撃、そして精神保健福祉法 32 条撤廃の攻撃がのしかかっていますが、「ほっと」のなかまも言うとおり、自立支援法はとんでもないもので、廃案あるのみです。私も、やはり、一緒に闘っていききたいと思っています。

もうひとつ、今、医療観察法施行の攻撃がかけられています、これもまた、とんでもないものです。

医療観察法にもとづく病棟は、3年で 24 カ所、7 月までに 6 カ所くらい、つくる予定でした。それが、地元住民の反対で着工も 3 カ所しかできなくて、推計される新規入院対象者の 3 分の 1 しか受け入れられないありさまです。

地元住民の反対理由とは、「危険だ」「逃げたらどうする」といったものだということです。これは、何を意味しているのでしょうか。

このような住民の反対を生み出すことこそ、医療観察法の狙いなのだとはいえるのではないのでしょうか。

もともと、「精神障害者」の犯罪率、再犯率が低いことは、法務省の数字の上からも明らかです。法務省は、ただし凶悪犯の率は高いのだといっています。

けれども、これもウソなのです。

精神鑑定で裁判権も奪われて、冤罪でっち上げられたり、正当防衛も認めら



医療観察法施行日に抗議
(2005年7月15日厚生労働省前)

れなくなるといった問題だけでなく、交通事故をよそおった殺人や行方不明などに含まれる数字（暗数）を考えると、ウソだというのははっきりしています。

そういうウソから出発して、「再犯のおそれ」が予想できるというウソ、医療観察法の対象になる人には手厚い医療で再発の防止をはかるというウソ、ウソばかりです。

重警備の完全閉鎖病棟で「手厚い」医療だなんて、とんでもないはなしです。また、医療というなら、医者や療法も患者が選ぶ権利があるはずです。

いまだ、そとの精神科病院でも、任意入院なのに完全閉鎖病棟に入れられたり、電気ショックをやられたりする例は少なくありません。いわゆる悪徳病院でなくとも、家族とぶつかっているのに家族しか面会できないといった、病院側のルールを押し付けられたりしています。ひどいときは、看護の手がたりないからと患者を拘束したり、保護室に閉じこめたり、それで死亡させた犀潟病院の事件も起こっています。

このありさまを根拠づけるのが、医療

観察法であり、医療観察施設です。

なるほど、「精神障害者」の犯罪率、再犯率は低い。だが、なかには凶悪犯罪を犯す人もいて、その人たちに対しては「手厚い医療」が必要なのだ、というのが医療観察法です。つまり、「精神障害者は危険だ」とは言ってないけれども、「精神障害者の中には危険な人がいる」と言っているのです、実は中身は変わっていません。

「精神障害者は危険だ」という考えかた、保安処分思想こそ、実は、医療観察法のほんとの狙いでした。

「危険だ」「逃げたらどうする」といった病棟建設に反対する住人の声とは、まさに、この狙いにのったものにほかなりません。

刑法「改正」、保安処分制度の新設の攻撃以来、「精神障害者」の血のにじむ闘いを軸にすすめてきたのは、「精神障害者は危険だ」という保安処分思想との闘いでした。

イタリアで精神病院をなくしてしまっ

たバザーリアは、「精神病」と言われているものは、精神病院がつくりあげたものだ、診療所は患者の苦痛だけ取り除けばよいのだと言いました。医療観察施設はこれとはまったく逆です。

私たちは、医療観察施設の建設に反対する闘いをおしすすめるとともに、「精神障害者は危険だ」という、保安処分の思想そのものと闘わないといけません。

短くまとめすぎてしまいましたが、要は、みなさんといっしょに、医療観察法をなくすまで、闘いつづけていきたいということです。

最初、乙津君のことを書こうと思っていました。実は、「ほっと」のなかまのうちでは、彼女がいちばん古い知り合いでした。刑法「改正」保安処分制度導入のころで、そのときは別の名前を使っていましたが、やさしくて、つよい芯がとおっている人でした。彼女が逝ってしまったと聞いて、ほんとに残念で残念でたまりませんが、それは別の機会にします。

開所10周年おめでとうございます



国鉄千葉動力車労働組合 執行委員長 田中 康宏

開所10周年おめでとうございます。

また日頃の私どもへのご支援に厚く御礼申し上げます。

「ほっとスペース八王子」の前身が「八

王子・赤堀さんと共に闘う会」だとお聞きし、三里塚闘争の現地などで共に反対同盟の集会に参加していたことを懐かしく思い出しました。みなさま方の地道な活動に心から敬意を表します。

私たちはJRの鉄道で働く労働者の組

合ですが、小さいながらもなんとか労働運動を再生させ、今の戦争へと向かおうとする状況を変えるために踏ん張っています。

とりわけ戦後60年の今年は、大民営化と戦争に向かって、社会全体を根底からひっくり返すような政策が押しすすめられようとしています。郵政民営化法案の破綻と国会解散－総選挙で、「障害者自立支援法」などの悪法はいったんはふつとびましたが、小泉政権は、きしみながらも一挙にこれまでのあり方をぶちこわす方向へ走り出しています。このなかでナショナリズムが大きく頭をもたげ始めており、こうした情勢に抗していく力として、労働者側の反撃をつくりだしていくことが絶対に必要だと考えています。

4月に尼崎でおきた列車転覆事故は、私たちに激しい衝撃を突きつけました。営利優先と労働組合つぶしの国鉄分割・民営化の結果がこれです。私たちは5月から「回復運転はしない」「制限速度を絶対に遵守する」などの安全運転行動を行っています。これが「違法行為」だと

してJRは、8名の役員に処分を行い、またさらなる処分をちらつかせています。今も連日運転士に管理者が同乗して威圧を行ってきていますが、今こそ労働組合の社会的責任を果たすときと考えています。一方で、この闘いは乗客からも大きな反響と激励を呼び起こしています。

私たちは、この戦争と民営化－労組破壊に立ち向かう労働者の国際的団結をつくりだすために11月6日、全国労働者総決起集会を開催いたします。昨年貴会からも賛同をいただきましたが、今年はすでに韓国・アメリカの労働組合から多数の組合員をともなって参加したいとの要請がきています。ぜひとも今年の熱気を上回る1万人集会を実現するために、みなさま方の賛同とご参加をお願いいたします。

弱肉強食を是とする世の中をともに手を携えてふっとばしましょう！

ほんとスペース八王子さんのますますのご発展を祈念いたします。

2005年8月

医療の現場から

遠く福岡から、10年の節目おめでとうございます

医療法人 周船寺病院 院長 船 津 邦比古

高校時代の同級生、堀部正君から「ほんと」が送られるようになってもう十年近

くなります。「ほっと」を読んだ最初の印象は政治的発言が多いことでした。やや過激で、現在の日本ではなかなか受け入れられない考えが随所に見られました。その理由は「ほっとスペース八王子」の生い立ちや、堀部君が学生運動に力を注いでいたことを知って解りましたが、こういう彼が指導している「ほっとスペース八王子」には興味をそそられました。今回この文を書くにあたり「ほっとスペース八王子」ホームページの「代表の挨拶」や「ほっとスペース八王子の専従職員の役割」を読みましたが、目標がきちっと明確にされていることに、あらためて感心しました。

しかし私がなによりも心を打たれたのは「安べーの闘病日誌」です。堀部君の辛い境遇、自分はこのまま駄目になるのだろうかという不安と絶望、その後挫折を繰り返しながらも職を得、信頼も得、少しずつ社会復帰して行く姿が述べられています。「闘病日誌」以外で彼が書いていることを読むと主張が強く、人の意見をあまり受け容れない印象を受けました。そしてそういう時は、なかなかその人の素顔が見えないものです。しかし「闘病日誌」では彼はとても素直に自分のことを語っています。文章も上手なので苦い体験や寂しい気持ち、あるいは嬉しいことがあってちょっぴり心が温まった時の情景が生き生きと読む人に伝わってきます。私は患者さんの手記をほとんど読んだことがありません。何十年も前某新聞記者の精神病棟潜入ルポを読んで以来、このたぐいの手記を読みたいと思い



福岡周船寺病院デイケアの仲間と交流
(2000年11月30日福岡百道)

ませんでした。しかし堀部君の「闘病日誌」は何度も読み返しました。彼が同級生だったこともありますし、文章力があるので医者として参考になったこともあります。一番には闘病時代を振り返り、辛かった、寂しかったと淡々と述べる素直さに心を打たれたからです。彼は主治医や治療内容についてはほとんど触れていませんが、たぶん彼は良い主治医に出会ったのではないのでしょうか？ 精神科医にもピンからキリまでさまざまな人がいますが、主治医との相性は大切なことです。

「ほっとスペース八王子」の皆さんが研修旅行で2000年に福岡へ来られた時、お願いして私どもの病院職員や患者さん達が交歓会を持つことが出来ました。この時私は先約があって皆さんに会うことが出来ませんでした。教えることが数多くあったということです。「やっぱり東京の人達は違うなー」とか言っていました。

今後の精神科医療について、病院経営者の立場から思うところを申し上げます。精神科医療の改善と充実は関係者が一致して究極の目標とするところですが、そこへの道のりはそれぞれ異なり、私ども民間精神科病院は私企業ですから、当然営利追求が必要です。しかし誤

解の無いよう申し上げますが、それは決して経営者が富を独り占めし、医療内容は貧困でよいと意図しているわけではありません。そのような経営姿勢が今後通用するはずもなく、実際遅れた病院の淘汰は既に始まっています。私が言おうとすることは、行政の方針に唯唯として従うことは、私どもにとっても医療利用者にとっても良いことではないということです。その一例は「ほっと」第102号でも特集されていた悪法「障害者自立支援法」です。医療利用者の方々は当然反対されるでしょう。私達は加えて経営上からも反対です。

他の例を挙げて説明します。福岡県は非常に民間精神科病院の多いところです。特に福岡市周辺は病院が集中しており、おそらく人口比で考えれば日本で一番多い地域ではないでしょうか？ そ

れだけに病院間の医療サービスは競争が激しいです。しかし切磋琢磨することによって医療の質は向上すると思います。大切なことは医療の利用者つまり患者の皆様、行政、民間精神科病院（日本の精神科医療の大部分を担っています）、関連施設などがそれぞれの主張をぶつけ合うことです。「ほっとスペース八王子」の皆さんと私どもと立場が違えば意見が衝突することもあるでしょう。しかしそれはものごとの途中ではあり得ることで、それらの主張が調整されることで医療は適切に充実の道を歩むと考えます。

なんだかまとまりのない駄文になってしまいましたが、最後に「ほっとスペース八王子」の発展を遠く九州からお祈り申し上げますと共に、機会があればまた交歓の場を授けて頂きたく存じます。

作業所で頑張る仲間・先輩の方々

10周年かぁ… えっ、まだ10年…？



八王子障害者団体連絡協議会代表 田 靖 史

「ほっとスペース八王子」創立10周年おめでとうございます。月日の流れるのは早いもので…、と通常であればこう来るのですが、私からすると「えっ、

まだ10年だっけ？」という感覚がどうしても残ります。つい半年ほど前にも「わかさ福祉会」の20周年誌に原稿を頼まれ、あちらの場合は素直に受け止められたのですが、今回の違和感はなぜなのでしょう。か。「ほっと」さんといえば公

に出来ること出来ないこと取り混ぜてトラブルの宝庫、別の表現をすれば個性の固まり、そんなところから印象深いことが多いので、そういう感覚に陥ってしまうのかもしれませんが。ただ、これは決して悪いことではないと思っています。精神障害の方の場合はその障害の特性上、細々としたトラブルは避けて通れない問題でしょうし、増して「ほっと」さんの場合は数少ない当事者運営の団体ですから、トラブルも様々あって当たり前、逆にそれを乗り越えてきた逞しささえ感じ、尊敬してしまうこともしばしばです。

そういえば、「ほっと」さんが八王子で産声を上げてまだ久しい頃、当事の代表の多田さんと性が同じことから、「多田さんはまた変なことを始めたネ」と会う人ごとに言われ、「あれは別の多田さんだよ。もっとおっさんの…」その度に、失礼ながらそんな言葉を返していたことを思い出します。10年も経つと私の方もしっかり“おっさん”ですが…。さて

さて、あのおじさんは今頃どこにいるのでしょうか…？

それはさておき、やっと10年か、まだ10年かは人それぞれでしょうが、今や100近い団体がひしめき合う八王子にあって数少ない当事者運営の団体、もっと言えば精神障害当事者の運営する団体としては唯一と言えるかもしれませんが、それ故にその存在は地域に置いては極めて貴重なものと捉えています。今以上に大きく立派になる、そんな必要は特別な思いとは思いますが、その強烈な個性は一方で大切にしながら、「わかくさ福祉会」や「パオ」といった同じ精神障害者関係の団体をはじめ、他の障害者団体とも協調して、今後もその歩みを進めていって頂けることが、私たち「八王子障害者団体連絡協議会」としても望ましいことですし、当然のこととして出来る限りの応援はしていく所存でありますので、今後ともよろしくお願い致します。

息長く、連帯していきましょう！



「ほっとさん」が開所されて10年。しかし、それ以前にもお付き合いが断片的にあった様な気がして、記憶の底を探ってみました…。

確か、駒木野病院の職員で佐藤さんと

結の会 脇 田 泰 行

いう方が始めて？…、その方がイギリスに行って…。

そして、10年と少し前に、「先代」の代表の自宅におじゃまして、私の属する「結の会」のことで相談に行ったことがありました。そこで、精神障害者の生活の赤裸々な様子や話を聞き、その中

で、私は驚きただおろおろするばかりでした。確か、そこが「ほっとスペース八王子」だったような気がします。それまでは、「精神障害」という「障害」について、頭で解っているだけで、自分に迫ることとしては何も無く生きてきたことを、思い知りました。そして、空白があり、時間が流れて、ここ2年ほど「八障連」でお付き合いが始まり、その関係で、この文章を書いています。

私の作業所「結の会」も多くの仲間を支えられながらも、紆余曲折の17年目になります。そして、作業所の毎日を見

る時、多くの矛盾と限界に突き当たり、自分たちだけでは、到底超えていけない壁をみます。作業所の問題は、今の社会構造が産み出し求めた結果です。障害者の問題は健常者の課題だと思います。この競争と効率の息苦しい現代社会に抗して、無理せず諦めず歩んで行きましょう。作業所に関わる多くの人が、中に閉じこもることなく、障害種別を超えて（これがまた難しい！）お互いの悩みや取り組みを共有し合い、そして外に向け発信しながら、息長く連帯して行きましょう。これからも、よろしく。

10周年記念誌おめでとうございます

パステル 小林 誉

ほっとスペース八王子のみなさまとは直接的な関わりはございませんが、機関紙は毎号楽しみに読ませていただいています。この度は10周年記念誌の発行おめでとうございます。

毎回変わる巻頭特集。時事に関することから、自分達の思いまで。なかにはドギツイ表現もあり。それもよし。一般誌には決してできない表現としての発行。

感心しながら読ませていただいています。

「十年一昔」と言われるように、10周年記念誌がでるまで紆余曲折があったと思います。これからもより継続って力ですよね。

これからもより読み応えのある機関紙を期待しています。

「ほっと」との思い出

がんばネット 斉藤 隆夫

安べーさんとの初めての出会いは、いつだったのか。覚えているのは、知らな

い男性から留守電に「明日、広島へ行きます。」と入っていた事である。こちらは、何の事だかわからない。今年1月に急逝した妻・富子と悩んだ結果、間違い電話であろうと結論し、翌日、何と二人は山口県へドライブへ出かけてしまった。(今となっては、申し訳ない話である)

夕方になり、そろそろ帰ろうかと思っていた折、突然、携帯に「堀部です」という電話がかかってきた。

そもそも、安べーさんとの御縁はホームページである。「がんばネット」は、生意気にもホームページをもっている。安べーさんは何と、僕達夫婦を管理人と勘違いしていたのだ。だから、メールで広島行きを伝えてきたらしいが、僕はその頃、自分達のホームページを、ほとんどのぞいたことがなかった。

しかし、安べーさんとはその日、どうかこうにか広島市内の喫茶店で落ちあう事ができた。確か、2000年か2001年である。

安べーさんの印象は「しっかりした人だな」というもので、予備知識としては労働運動、政治活動をされている方なので、なるべく怒らさない様にと気がつかってしまった。

そんな、ひょんな出会いの後、2002年「ほっとスペース八王子」の研修旅行が広島で開かれた。

この年は、「がんばネット」にとっても、会員制として第1回総会を開いた記念すべき年だった。総会の準備をしていた四月頃、また例によって安べーさんから突如電話があり、「広島で研修旅行をやり



今は亡き富子さんとのツーショット
(2002年9月10日広島)

たい」と言われた。

最初はまだ、「がんばネット」がどうなるかも分からない状態で、何をしていたかも分からず、二の足を踏んでいた。

しかし結局、押し切られる形で、2泊3日の研修旅行の1日目を「交流会」という形でセッティングする事になった。

それ以降の交渉は、故人である妻、富子がほとんど行なった。

かくして、2002年9月10日、まだまだ残暑の厳しい広島の地を「ほっと」御一行13名が訪れた。広島空港からは、リムジンバスで13時に広島駅到着。迎えたのは、僕達夫婦と副代表の宮野さんの3人だった。朝から夫婦ゲンカをしていた僕達を、宮野さんが間に入り、何とか、なだめるような最悪の状態だった。

当時、躁状態にあった妻は、阿部さんと仲良くなり、阿部さんに文句を言い謝らせるという結末となってしまった。

昼食は、うどん屋で済ませ、一行は一旦、ホテルへ。この調子で書いたのでは紙面が足りなくなるので、とにかく肝心の交流会の事を書くと、昼からは地域生活支援センター「ふれあい」でメンバーさんとの交流会を行なった。十数名が集

まってくれて、小グループに分かれ、色々な質問をしたり、井ビンゴ大会で盛り上がった。短い時間だったが、有意義な交流がもてたと思う。

夜の部では、いよいよ「がんばろネット」との交流会。「ほっと」からの要望は、“お酒は出さない、広島名物の店、なるべく安くあげる”というもので、源蔵という居酒屋に場所を決めた。源蔵では、広島名産の小イワシ料理を次々と、安く食べる事ができた。「がんばろネット」からは14名が参加し、全員で27名もの大宴会。酒も出ないのに、結構盛り上がった事を、よく覚えている。

「ほっと」のメンバーも、それぞれに個性を出してくれた。涙を流す人あり、喋りまくる人あり、マジックを延々する人や、おかまさんの人などなど、とても楽しく交流させて頂いた。本当に、個性あふれる方々であった。

二次会では、近くの居酒屋に場所を移し、9名で、こじんまりと飲んだ。

皆さんが、それぞれに強くたくましく



広島仲間たちとの交流会の後、がんばろネットとの二次会
(2002年9月10日広島)

生きておられるということに、とても深い感銘を受けた。ぜひ見習いたいと感じたし、これからも、そんな「ほっと」であり続けていただきたいと感じた。

たった1日限りの、交流会だったというのに。何て、熱くて暑い時間であった事だろう。まだまだ「これから」の、がんばろネットではありますが、どうか、又「ほっと」の皆様にお会いできる日が来ますように。

最後になりましたが、「ほっと」の皆様益々のご活躍とご発展とを、心よりお祈り申し上げます。「ほっと」がずっと「ほっと」らしくありますように。

自分に正直であること



ほっとスペース八王子の開所10周年、おめでとうございませう。心よりお祝い申し上げます。

さて、ほっとスペース八王子と言えば、

ゆいまーる生活館 土居 幸仁

職員もすべて障害当事者という都内で初めての作業所ということで、当初は過激な団体だという風評があり、初代代表の多田道夫さんとお会いするときには、自分の中の内なる差別性を突きつけられるのではないかと、少々緊張していたこと

を思い出します。

実際にお会いした多田さんは、大変温厚な方でそれから長いお付き合いがはじまることになりました。

多田さんと言えば、八障連として毎年おこなっていた市との予算要望の席に精神障害の当事者としてはじめて出席され、顔を紅潮させながら、しかしゆっくりと自分たちの実情を訴えるその姿に、当事者の生の声の重さをあらためて実感したことを今も覚えています。

そして、当初は、代表の多田さんイコールほっとスペースでしたが、最近のほっとスペースはというと、代表が堀部正さんに代わり、八障連の会合にもワークセンターの会合にも、数人の仲間に参加されるようになり、設立当初の職員もメンバーもみんな当事者ということの良さ、風通しの良さを感じ、いわゆる施設としての作業所から最も遠いところにある作業所だなとうらやましく感じます。

また、最近のほっとスペースといえば、ワークセンターの事業に参加する中で、いろいろとクレームを出されることでも少々有名(?)です。

それを受ける立場の自分としては、「えっ、また？」という気持ちも正直あるのですが、それでもそうやって、自分たちがおかしいと思ったことを率直にお話してくださるのは、とてもありがたいですし、それ以上にそういった姿勢を好ましく思っている自分がいます。

そう、僕がほっとスペースの一番の良いところだと思うのは、自分に正直であるところだと思います。



八障連総会にて
(2005年5月21日八王子子安市民センター)

それは、多田さんにも感じたことでしたし、今のほっとスペースの皆さんにも感じることです。

自分に正直であるということは、周りとはトラブルになることが多いので、それを、単純に良いとか悪いとかいうのは難しいのですが、僕自身は、トラブルはコミュニケーションのきっかけだと思いますので、とても良いことだと思っています（もちろん、相手の言い分もよく聴くということが前提ですが）。

そして、ついこの間、「みんなちがってみんないい」というイベントで、のぼりを立ててゲリラ的に「障害者自立支援法案」反対を呼びかけている姿を見かけ、あゝ、これこそが、ほっとスペースだ！と感じ、こんな当事者団体が八王子にあることの幸せを感じました。

もちろん僕はのぼりを立ててビラを配るなんてことはできない性質なのですが、このように当事者の人たちが切り込んでくれるとその後に続いていくことぐらいはできるかなという気がします。そうやって、後に続く人たちがたくさん出てくればいいと思います。

このほっとスペースが節目の年に、障

害者自立支援法案が上程されるのも、何かの因縁かもしれません。この法案については、衆議院で採択され、いよいよ参議院での審議がはじまりますが、まだまだ参議院での修正や政省令での修正を目指して、まだまだ諦めないでともにがんばりましょう。

10周年を迎え、ほっとスペース八王

子の人たちが、もっともっと仲間の和を広げ元気になり、八王子の障害者運動が活性化されることを、そして願わくは、ほっとスペース八王子の皆さんの活躍により、八王子が、誰もが自分に正直で元気になれるような街になることを期待しています。

7月13日の夜に

たんぽぽの家 樋口 徹郎

「障害者自立支援法が衆議院を通過」の一報。ほぼ同時に、「ほっと」より原稿の催促が入る。これも因果なのかなという思いで、ようやくペンを握った次第である。

「ほっと」は当初より「過激」とか「排他的」と言われ、警戒心をもって注目する存在であった。多くの「当事者主体」と言われる作業所が、その実「専門スタッフ」の一定コントロール下で、「スマート」に頑張っているのに対し、「ほっと」は「エネルギーッシュ」に頑張っていた。そのエネルギーが内心怖かったのかも知れない。

労働運動や反戦運動への積極的な関わりは、正直今も近寄り難い要因ではあるが、それが必要であることは理解できる。さらに、それ故、離れていった多くの当事者がいたことも止むを得ないと考える。ただし、「理念」として理解できるのであって、「精神病者の解放」が

運動の継続によって勝ち得るとは思えない。交渉や譲歩は似つかわしくないが、ある程度のしたたかさは必要だと思っている。

「障害者の自立を妨げる法律」の成立は、ほぼ間違いない（不成立の時は解散？）。自分たちは、既に「新しい施設体系のどれに移行するべきか」を検討している。少なくとも、今、ここにいる人たちを守る責任が自分にはあると信じている。その思いは「ほっと」の皆さんも変わらないに違いない。だからといって、



「ほっとスペース八王子」第15回総会で挨拶する筆者
(2005年4月9日八王子クリエイティブホール)

迎合や妥協の類いはし辛いだろうから大変だろうと思う。

以前「毒まんじゅう」の話をした政治家がいた。その大まかな意味づけさえも忘れてしまったが、確か「食べたら死ぬ」という意味ではなく、「それを作った（提供した）者の意に背けなくなる」ということだったと思う。自分たちは長年に食べてきたお陰で大きくなった自覚はある。毒もかなりまわってしまったかも知

れないし、まだ充分には効いているふりをしているのかも知れないし、この程度は毒にもなっていないかも知れない。

これからの10年は、予想だにしない困難が待ち受けていると悲観的に考えているが、お互い気持だけは負けないでいきたいものである。「まんじゅう」を食べるのも別に悪くないと思います。

益々の御発展を祈念いたします。

「ほっとスペース八王子」10周年に寄せて



わかくさ福祉会 山 本 誠

まだ10年、もう10年というのが正直な感想です。というのは、ほっとの前身の赤堀さんを支える会の時から、勉強会への参加や支える会への協力依頼などがあり、その頃からのおつきあいがあったためかと思います。その当時は、この仕事について間もないということもあり、赤堀さんのこともよく知らず、案内状などをいただくと、どのように関わってよいものかと、正直、緊張感を覚えたのも事実です。

その後、長房町の事務所から西八王子の駅前に引っ越され、作業所の補助制度を使って活動が続けられると聞いて、補助金制度の中の制約と、ほっとが目指していた当事者による当事者のための活動との折り合いがうまくつくかなと思っ

たものでした。また、作業所は「障害者を低賃金で働かせる場所」という印象も持たれていたかなという思いもありました。しかし、22年前に八王子で初めて出来た精神障害者の作業所「わかくさの家」（現ピアわかくさ）も、その当時、まだセルフヘルプグループなどという概念も無い時期に、Eさんを中心としたK病院の退院者グループやデイケアの卒業者をはじめ、病院や地域で社会参加のチャンスを望んでいる人たちを、社会的に支え、精神障害者の抱える課題を具体



「ほっとスペース八王子」第15回総会で挨拶する筆者
(2005年4月9日八王子クリエイティブホール)

的に解決していこうというものでした。ですから、ほっとさんの理念と方法が異なっていたとしても、「障害者のあたりまえの権利をまもるための活動」ということでは、一致していることかなと思っていました。

ほっとさんは、作業所などの利用が難しいと思われる方、例えば、病状がとても不安定でプログラムには到底乗れそうもない方、これまで、いくつもの場所であまり行かず、行き場を失った方など…、ほっとさんにお電話すると、「まずは来てみてください」と答えが、帰ってきました。いつか、ほっとの方針を聞いたことがあります。それは「具合が悪い時ほど、本人は救いを求めている、障害や病状が大変な人ほど、困難を抱えている」「病気や障害を持った自分たち当事者は、そういう人を切ることは出来ない、自分がその立場をわかっているから」というようなものだったと思います。それを実行するのは並大抵のことではないと思います。相当な苦勞をされたことも聞き及

んでいます。

それから、私は、「総会」や「語る会」に何度か出席させていただいています。どの「場」も、思っていることを「出会う」「向かい合う」という雰囲気、ある時は「一触即発の雰囲気」、ある時は「ゲストに関係なく自分たちの世界へ」…、少々面喰う時もありますが、形にとらわれ過ぎることなく、「自分たちが主人公であり、誰もが主人公になれる世界にしていこう」ことを実践されていることを、垣間見ることができました。

ほっとさんは、利用者さんや職員さんも変わられる中で、限界点を押し量りながら、そして原点に返りながら、そして、現在点を見つめていく活動だったかと思います。それは、ほっとさんだけでなく、私たちも同様です。これからも八王子を誰もがもっと住みやすい街にしていこうために、一緒にやれることがあればと思います。

これからもよろしくお願いします。

私たちにとっての本当の課題



東京都精神障害者共同作業所連絡会 田中直樹

設立10周年おめでとうございます。

そして、この「10周年」にいたる、開設にいたるまでの長い前史と、ほっとスペース八王子に参加されている、あるい

はこれまで参加してこられた方々一人ひとりの、さらに長く深い歴史の上にあるこの10年間の活動に、あらためて敬意を表します。

世界的にも屈指の精神病院の密集地の八王子市にあって、精神障害を持つ当事

者自身にしっかりと基盤を置き、そしてそれを支えるための公的制度を活用することにより、とても現実的で実行力のある活動を展開されてこられたことは、全国の精神障害者の支援活動や事業のあり方に多くの示唆を与えるものだと思います。

ほっとスペース八王子のみなさんと直接お会いするのは、都精作連の総会や秋のバレーボール大会など、年に数回ですが、いつも感じるのは、みなさんの礼儀正しさと率直さ、そしてひとつひとつの活動に取り組む姿勢の実直さ、熱心さです。私も、その姿に学びつつ、これからも活動を共有する場面をよりたくさん持てればと願っています。

ところで、私自身も、作業所の職員になって20年余りが経過し、しばらく前に、所属作業所の設立20周年を迎えました。そのときに感じたのは、「これまでの実績を祝う」ということではなく、「まだまだ課題がたくさんある。自分たちはこの程度のことしかできていない」という思いでした。それは、いたずらに卑下するという意味ではなく、やはり、今の精神障害者福祉はまだまだ遅れていて、その遅れている姿の一端を自分たちも担っているということでした。「○周年」という節目は、自分たちの位置を確認するととても大切な機会だと、そのとき改めて思いました。

国では障害者福祉の「改革」と銘打って「障害者自立支援法案」が国会に提出されました。この新しい法律は、障害者に多大な犠牲を強いるものであることか



ソフトバレーボール東京都大会で優勝の表彰をする筆者
(2003年11月20日千駄ヶ谷の東京体育館)

ら、全国の多くの障害者や家族、関係者から疑問や反対の声が、かつてない大きさを訴えられてきました。ほっとスペース八王子のみなさんが廃案に向けた運動を強力に展開されてきたことも周知のところだと思います。この法案は、郵政民営化法案のドサクサにより廃案となりましたが、厚生労働省は次期国会に再提出する方針であることが伝えられています。関係団体や個人の中で、この法案の賛否は様々ですが、これまでの障害者福祉の思想を大きく転換する中身を持ったものであることは確かです。

いずれにしても、本来求められる障害者福祉をどう実現していくのか、全国民的課題としての議論に広げ深めていくことが、これからの私たちにとっての本当の課題だと思います。そして、その基盤である私たちが行っている地域の中のかげがえのない活動を、さらに発展させていくことが大切なことだと思います。

今後とも、ほっとスペース八王子のみなさんの変わらぬご活躍、ご奮闘を心より祈念いたしております。



久留米より感謝をこめて

ピアくるめ 磯田 重行

私は福岡県久留米市の障害者生活支援センター「ピアくるめ」で働く当事者職員です。ほっとスペース八王子は14年の秋と15年の秋にお伺いさせていただきました。

初めてお伺いした時は14年ぶりの東京で、緊張でいっぱいだったことを思い出します。まず八王子の街の大きさに驚き、ほっとスペース八王子のみなさんのエネルギーに驚きました。

私は24歳で統合失調症を発症し、入

院こそしませんでした、32歳までの8年間、ほとんど家で過ごしてきました。まさか東京まで行くことができるなんて夢のように感じたことを思い出します。

昨年、当事者どうして結婚しました。苦しいこともたくさんありますが、今は楽しいことや希望の方が多い日々です。

またいつかほっとスペース八王子の方々とお会いできる日を楽しみにしています。

ほっとスペース八王子さん10周年記念に寄せて

浦河べてるの家 どんぐり会 伊藤 知之

ほっとスペース八王子の皆さんと知り合ったのは、2001年の秋頃にメンバースタッフの皆さんが大勢で浦河のべてるの家に見学に来られた時です。そのときはできたばかりの新作業所「ニューべてる」でべてるのメンバーとほっとスパー

スさんの皆さんがべてるの紹介を交えたオリエンテーションで楽しく交流をしたのが今でも印象に残っています。

その後、2001年の11月中旬に第1回八王子べてるまつりに私を始めとするべてるメンバーが多数八王子にお邪魔して壇上でお話をさせていただき、その後の交流会でほっとスペースの皆さんを始めとする大勢の皆さんとお知り合いになり、交流できました。これもべてるに関わってからのことですし、べてるに関わることでこの4年以上本当に大勢の方とお知り合いになれたのですが、ほっとス



たった一人のべてるの家の仲間との交流会
(2001年9月5日浦河のホテル)

ペースの皆さんはそのきっかけの1つを与えて下さったのではと思っています。

それから2002年の八王子まつり・2004年の八王子まつりの交流会に参加させてもらったのですが、そのときも多分ほっとスペースの関係者の皆さんが何人かいらっしゃったでしょう。私は講演・研修・学会で全国の土地を訪れ、その土地の当事者の皆さん・専門職の皆さんと

お知り合いになる機会が多いのですが、今まで何カ所か行った土地の中でも八王子はメンバーさんの個性が強く、深く印象に残っています。

私はこれからも東京を訪れる機会が多いかと思います。そのときには、時おりふとほっとスペースの皆さんのことを思い出し、メンバーの皆さんの元気をもらえたらいいと思います。

10周年おめでとうございます

執 行 裕 二

僕は、6年頃に「ほっとスペース八王子」へお邪魔しました。

当時は、確かタバコをよく吸う多田さんが代表でした。親切に八王子駅まで迎えに来てくれました。

今では堀部さんが代表なんですね。

僕がお邪魔したときは、まず堀部さんの結婚式のビデオを見ました。

その途中電話が鳴り始め、職員の方が夜中なのに来たりし始め何か様子が変わりました。

その騒動は翌日まで続きゆっくりとお話をするできませんでした。

その騒動は何かというと自殺未遂でした。

今でもその方はご存命ということで安心しています。

お世話になった廣井さんや皆さん、お元気ですか？

僕は元気に生活しています。

それではお元気で。

エールを送ります！

クッキングハウス

10周年おめでとうございます。

安心できる居場所と語りあえる仲間、そして、必要なサポートがあれば、心の

病気や障害をもっている人も大丈夫。

これからも地域の中で活動続ける同じ仲間としてがんばっていきましょう！

ソフトバレーボールを通じての交流

「ほっとスペース八王子」10周年に寄せて

共同作業所 銀杏企画 瀬川 聖 美

ほっとスペース八王子の皆様とのお付き合いは、2002年に高知県で開かれた「第2回全国精神障害者スポーツ(バレーボール)大会」の予選会である東京都代表チーム選考会の時からです。元々ほっとスペース八王子チームは東京都精神障害者共同作業所スポーツ交流祭バレーボール大会でも強いことは有名でしたが、代表チーム選考会決勝では私の勤務しております銀杏企画と決勝で戦い、フルセットの末、見事代表の座を勝ち取られました。うちのチームは総勢60人位の大所帯で応援もものすごくにぎやかですが、ほっとスペース八王子チームは3人位の少ない人数で堀部さんのチアリーダーのような足を上げての応援がとても強烈な印象でした。

その後の全国大会では主催団体からの補助が全くないということで高知県までの旅費宿泊費の工面が大変で、私も作業所交流祭、代表チーム選考会の運営、全国大会東京チームの支援をする東京都精神障害者共同作業所連絡会(以下都精作連)の企画部会員だった関係で、助成財団に助成金の申請や、カンパ集めというかたちで多少ですが支援に協力させていただきました。都精作連会議の後に飲食する

場合など必ずつり銭はカンパに回すなど高知への旅費応援のために企画部会は本当に燃えていました。というのもほっとスペース八王子チームの皆さんは礼儀正しく、いつも「ありがとうございます」と頭を下げられますし、厳しそうな!? 監督の指導の下、必死で練習する姿を観させて頂く中で、こちらも応援しなくてはいけないという気にさせられるチームなのです。そしてどうにか費用を工面しての全国大会 in 高知。遠方の為、応援団が少なく心細かったほっとスペース八王子チームですが、地元の小学生の応援を受けて、見事3位入賞で銅メダル獲得!! しかし、それで満足しなかったほっとスペース八王子チームはまた練習を重ね、東京・神奈川ブロック代表の座を勝ち取り、翌年の静岡県で開かれた



銀メダルを獲得した静岡わかふじ大会
(2003年11月9日静岡市)

「第3回全国精神障害者スポーツ(バレーボール)大会」では、応援の為、一緒に同行して頂いたミュンヘンオリンピック男子バレーボール金メダリストの西本哲雄さんをもうならせる素晴らしいプレーで準優勝し、銀メダルを獲得されました。その時の記念写真を見ると惜しくも全国優勝は逃しましたが、皆さん精一杯やったと、とても充実された表情に見受けられます。ここ2年ほどは代表からは遠のかれています。ほっとスペース八王子のチームワークには素晴らしいものがあります。来年の兵庫県大会には是非、東京・神奈川ブロックの代表になって出場



前夜祭で全国の仲間と交流
(2003年11月8日静岡市)

してください。これからも「ほっとスペース八王子」を応援していきます。

最後になりましたが、ほっとスペース八王子の皆様、開設10周年誠にありがとうございます。今後とも精神障害者の地域生活支援の拠点となるべくお互いに頑張っていきましょう。

10周年おめでとうございます

ドドンパ荻窪一同(杉並区、あおば作業所、グリーンウッド、情報センターあおば、ル・ペタル)

10周年おめでとうございます。

ほっとスペース八王子さんとは、作業所のつきあいというより、バレーの対戦相手としての印象が強いです。都



のバレーボール大会で2年連続で同じブロック、そして2回とも決勝という大舞台での対戦。共によい試合だった。(と私達は思っています)のですが、2連敗という結果に終わってしまっています。ほっとスペースを倒すまでは、全国には行けない、いや行きたくない!!と、打倒ほっとスペースを掲げて、選手一同、日々練習しています。

これから先、お互いの交流を深めるため、また良きライバルとして、切磋琢磨するために、練習試合などお願いしたいと思っています。そして、また決勝戦で対戦できることを楽しみにしています。

◀ あおばの仲間からの投稿カット

すごいぞ八王子

たなし工房 白 倉 悦 子

10 周年おめでとうございます。

それといつも通信をありがとうございます。充実した内容でいつも興味深く読ませていただいています。

色々苦闘しながら当事者同志で運営していく姿が通信を通して伝わってきます。

大変なことがこれからも多々あると思いますが、寄るべき軸を持ってこれからも進んでいって欲しいと思っています。

話は変わりますが、ほんとスペースといたらソフトバレーボールの強さを忘れてはいけませんね。

昨年 of の東京都の大会の時、E コートの

決勝戦で闘うことになりました。負けるのは解っていましたが、どれくらい闘えるか楽しみでしたが、圧倒的な強さにアッという間にやられてしまいました。でも緊張感があってとてもおもしろく、楽しめた試合でした。久々に試合で興奮したのを覚えています。そしてバレーボールの強さもさることながら、堀部さんのボンボンを持って高く上げる脚の応援も、可愛い着ぐるみを着た応援もいつも楽しませてもらっています。

これからも、日々の活動も運動も頑張りすぎず、でもこだわるところはしっかりがんばってやっていって下さい。

「ほんとスペース八王子」に携わった仲間たち

ほんとに来てホットになれるかな



「ほんとスペース八王子」開所 10 周年記念おめでとうございます。石の上にも 3 年と言いますが、私がほんとスペースさんに通い始めて早や 4 年目になりま

ボランティア 村 里 季巳江

した。今までは学校の PTA 活動や、町会の役員、趣味のママさんバレーボール、コーラス、ケーキ作りと楽しく元気にやって来ました。今もまだ続けているもあります。だんだん年を重ねてきた今、家族の構成も変り、子供達もそれぞれ独

立して行き、主人も定年退職して、二人だけの平凡な生活を過しています。残された人生を有意義に少しでも世の中の役に立ちたい、貢献したい気持でした。ふと新聞の折り込みに、ボランティアの募集が目に入り精神障害者の施設で夕食のお手伝いとありました。これなら私にもやれるのではと早速ほっとスペースの事務所を訪ねてみました。今は事務所も明るく整頓され、きれいになりましたが、最初の頃は内心びっくりしました。私は勤めの経験もなく、他の施設や作業所に行ったこともありません。障害者の施設はこんなものかと思っておりました。政府の福祉に対する予算の少ないこともわかり、弱者にもっと温かい支援を願うばかりです。

私の仕事は会員さん達の夕食を作る事です。栄養士や調理師の資格は持ってありません。料理好きのただの主婦です。少ない予算で毎回の献立を考え、限られた時間に買物に行き、5時までには食卓に料理を並べなければなりません。毎週火曜日と第1、第3木曜日に通っております。

私の来る日を楽しみにしている会員さんも居て下さり大変嬉しく思います。以前は会員さんも多くてソフトバレーボールの練習が盛んでみんな張り切ってとても仲良くチームが団結してまとまり活気がありましたね。全国大会に出場され準優勝されたり、本当に良かったと思います。おめでとうございます。あの頃は食事をされる方も多く20～23人の申し込みがあって嬉しい悲鳴でした。てん



村里さんの美味しい料理のほんの一例

てこ舞いしながら、今は（ほっとスペース八王子を）去られた男性でも手捌（てさばき）の良い料理上手な阿部さん、事務員の桜井さん、体格の良い汗かきのゴンスケさん、哲学者になれば良かったね…と冗談云ったりした本の大好きな黒川さん達等沢山の方々にお手伝いして頂きました。和風さんには焼き物のカップ、可愛い絵を孫に頂きました。ありがたく感謝しております。現在は会員さんも入れ替り若い人が増えて曜日ごとにプログラムが組まれてそれぞれの目的に合わせて動き、頑張っている姿が目立つように感じられます。とても良い事だと思います。秋にはエレクトーンの実演会も計画されています。その時は私も楽しみに聴かせてもらいます。橋本君、三千代さんが頑張って下さい。食事作りの手伝いも今まで包丁を持った事もない会員さんもそれなりにやる気を出して慣れない手付で、一生懸命野菜を刻んでくれます。そばで心配気な様子で見守っていた林さんは、うっかり自分の指を切ってしまい大騒ぎの一駒もあったりして、とてもなごやかな雰囲気になっております。食事の支度もお皿を出したりお茶わんを並べ

たり、出来上った料理を盛り付けしたり、お鍋やマナ板等洗物を手伝ったりで助けております。とても積極的に became ね。食事の後は今日の感想を一人ひとりに聞かれています。何の手伝いをしましたか、料理の味はどうでしたか、美味かった少し薄味だったとか、濃かった、時にはコゲる時等焼けすぎは体によくないと甘い点数、辛い点数を聞かされています。嬉しかったり、悔しかったりとても参考になります。この次は美味と喜ばれる様に気を付けなくてはと、反省の連続です。私も今頃は会員さんと気持ちが通じるようになり仲良くお手伝いさせて頂いております。ユニークな穴ちゃんとも仲良くなれて、時々大騒ぎをして皆んなを困ら

せていますが、本当は人なつっこく、明るくて、優しくしっかり者です。先日テレビで細木数子の正しいお茶の入れ方を見て覚えたと言って、丁寧にお茶を入れて私にサービスして下さいます。やさしいその心が嬉しく感謝しております。本当にありがとう。いつまでも可愛い穴ちゃんできて欲しいです。私のモットーは人には親切、嘘は言わない、意地悪しない、いつも和顔愛語で明るく元気ですべてに感謝しながら前向きに歩いていきたいと心がけています。何事も口先ばかりでなく行動し、それを続けていくことの大切さ、「継続は力なり」お互いさまがんばっていきましょう。ほっとスペースさんのご発展を祈念申し上げます。

二人の男性



私は、火曜日のエレクトーン教室を担当していますが、今から8、9年前、絵画教室と云うのがありまして、講師は、元会員で初代運営委員の大根田恭一さんでした。月一回、日曜日の午後、総合福祉会館でありました。「陽子ちゃんもおいでよ。」と、大根田さんに誘われて、出席したのが、96年の12月のことでした。集まった人は10人位いたと思います。大根田さんは、教えるのがとても上手で、私が彫像を前にして、ためらっ

ボランティア 宮田陽子

ていると、サッサーと、輪郭を描いてくれて、私も楽しくデッサンをする事ができました。私は1カ月に1度の絵画教室が楽しみでした。普段は、ただ普通のお兄さんに見える大根田さんが、この日ばかりは、風格のある画家に見えたものです。最近あまり電話もかかって来なくなりましたが、友人として早く睡眠障害を治して健康人になって欲しいと心から願っています。

また、大根田さんのお陰で2度、忘年会にも出させて頂きました。ご馳走を頂いて、歌を歌って、とても楽しく過しま

した。もう7、8年前になると思いますが、忘年会の後、カラオケボックスに行き、私は、その当時流行っていた「あなたに逢いたくて」を歌ったのですが、堀部さんが、松任谷由実の「恋人はサンタクロース」を歌って、身体をしなやかに動かして、とても上手でした。元々、堀部さんは、音楽の素質があるんですね。10月18日にあるエレクトーンの発表会に向けての練習で、堀部さんは、ほっとが終わって、1人残って、2～3時間練習して、「フライミートゥザムーン」を何とか弾きこなしました。すごい努力家だと思って、私は感心しました。

堀部さんは、4月の総会の時、ご自分で仰っていたので、ここでも書いて差し支えないと思いますが、自分も精神分裂病だったが、完治したと主治医に言われて、今は薬飲まないで頑張っている、と聞いて、どうか、堀部さんが再発しない様にと祈るばかりです。良い例を作ってください。



発表会に向けて猛練習

ここに二人の男性の事を書きましたが、私にとっては、男と云うだけで、頼りになるものを感じます。

絵画教室は長く続きませんでした、帰りが11時を過ぎる頃まで、運営委員会をやって、ほっとスペース八王子の基礎を築いて下さった大根田さん達、どうもありがとうございました。

代表兼所長の堀部さん、そして職員の浜さん、井田さん、居心地の良いほっとになって嬉しく思います。健康面に充分留意して頑張ってください。

ほっとバレーボールチーム



ソフトバレーボール監督の鈴木功一です。

「ほっとスペース八王子」開所10周年おめでとうございます。

10周年を迎えられたのも、職員(元

ボランティア 鈴木 功 一

職員)や関係者、会員の方々の努力と支援者、援助された方々により出来たことと思います。今後とも、より一層の努力と会員の協力で、ほっとスペースが発展して行きますよう、お願いいたします。

10周年記念誌の原稿ということで、私のほっとスペースとの係わりについて

書きたいと思います。

ほっとスペースがまだ、千人町に事務所があったころ、私が監督をしている、ママさんバレーボールチームの練習に、ほとどの会員が数名参加したのが始まりでした。私も障害者にスポーツを教えるのが初めてで、その頃は会員が1人練習を休むと、ほかの会員は来なかったり、練習で技術面の指導をしても、返事は無し、練習途中ですぐ休んだり、注意すれば次の週から練習に来なかったりと、会員(選手)のスポーツへの取り組み方や、方法など、理解できずに対応していました。

監督になったのは、平成12年に精神障害者バレーボール東京都大会で、ほっとスペース八王子チームが優勝し、次の年に関東大会(第2回全国障害者スポーツ大会・高知県)予選に出場する為に、ソフトバレーボールチームの選手がみんな、ママさんチームの練習に参加するようになり、技術面、攻撃、守備等、チームワークなどについて、指導して大会に送り出したところ、ほっとチームが、まさかの関東大会優勝、第2回全国障害者スポーツ、高知県よさこい大会の出場権を取って、私に報告しに来たのです。私は、このチームはどんなチームなのか不思議に思えたのです。

その中で、選手が全国大会に出場して、1つでも試合に勝ちたいので、監督をお願いできませんか、と相談がありましたが、すぐに返事をしたわけではありません。じつは、前年の仙台市で開催された、第1回全国精神障害者大会では、関東代表の東京都2チームは1セットも取れず



わかふじ大会で銀メダルを獲得し、皆で監督の胴上げ
(2003年11月9日静岡市)

に試合に負けて、バレーボールレベルの高い大会であるのと、私の指導で全国大会で勝てるのか? 技術面、作戦、チーム構成、チームワーク、精神障害者とスポーツとは、全国大会とは、色々考え悩みましたが、彼ら全国大会への熱意が伝わり、監督を受けることになりました。

いよいよ全国大会へ向けてのチーム作りと練習が始まりました。チーム作りでは、技術だけ指導しても、それを理解する能力も取り方も1人1人違いますから、少しずつ彼らと接する時間を持ち、病気のことや、日常生活、趣味、いま興味あること、生活面での悩み等、色々な話をし、彼らを理解し1人1人の事を自分なりに理解した上で、怒鳴りつけることもありました。その中で、選手や自己で体調管理に努めるようになり、始め、練習日に体調を合わせて参加するように努力し、夏の暑い体育館での練習、夜はママさんチームとの練習と、つらい練習にもついて来てくれました。

最初の頃の彼らと、ここまでやって来た彼らとでは、ずい分と変わり、前向きにバレーに取り組むようになり、目の輝きも違って来たように思います。

そうした厳しい練習の積み重ねにより、全国精神障害者ソフトバレーボール、高知よさこい大会において、メダルを取ることが出来ました。

選手1人1人がスポーツを通じて得た充実感や、勝利を勝ち取った喜び、負けた悔しさなどが、彼らにとって、今までにない、貴重な経験となってきたのではないかと思います。

スポーツで自分の力を発揮できる場があれば、今後も会員が自分らしく生きて行けるきっかけになるのではないでしょ

うか！

会員が社会復帰を目指そうとする、第一歩にスポーツが成れば、良いと思います。

ほっとスペース八王子ソフトバレーボールチームは翌年、第三回全国障害者スポーツ大会静岡県・わかふじ大会に、2年連続関東代表となり、見事準優勝することが出来ました。

最後に今後も職員、会員の方々のご努力が、さらに大きな成果となり、15周年、20周年と迎えられますよう、よろしくお願いいたします。

政治抜きに現状を変えていくことはできない

元ボランティア 桜井悦子

「ほっとスペース八王子」10周年おめでとうございます。一言で10周年と言っても、ここに至るまでの道のりはさぞ苦しい道のりであったことと思います。運営に携わってこられた職員の方、それを支えてこられた会員の皆様に敬意を表します。

私は平成14年にボランティアとして、ほんの少しお手伝いをさせていただきました。初めてほっとスペースを訪れた時のことは今でもよく覚えています。見落としてしまいそうな狭い入り口の中には、私の知らなかった世界がありました。皆さんにどんな態度で接したらいいのか、正直言って戸惑い、不安でした。

私がお引き受けしたのは主に「語ろう会」のテープ起しという作業は初めてで

したので、慣れないうちはなかなか大変でした。一番苦労したのは、話している方の声が聞きとれなかったり、どなたが発言しているのかわからないことでした。何度もテープを巻き戻して同じ声を見つけてお名前を探りあてたり、音量を上げてできるだけ正確に聞き取るよう努めました。

聞き慣れないことば、たとえば「ミンザイ」って何だろうと、辞書を引いてみましたがわかりません。でも前後の皆さんの発言から、眠剤だとわかり、ほっとしたこともありました。

テープを聞いていて感心したのは、皆さんが活発に発言し、真剣に討議に向き合っていることでした。赤裸々な辛い胸の内を聞きながら、思わず目頭が熱くな

ることもしばしばでした。この作業を引き受けなかったならば、私はこの方達の厳しい現実を知ることもなかったし、関心をもたなかったかもしれません。

私が何よりも感謝したのは、今まで何の関わりもなかった部外者である自分を信頼し、仕事を任せて下さったことです。この信頼に何とか応えなければ、という思いが常に私の支えになりました。

残念ながら会員の方々とは、ほとんどお話する機会がありませんでしたが、この仕事を通じ、お名前もすっかり頭に入り、身近に感じることができました。また、毎月いただく会誌でのユニークなペンネームも覚えましたので、しばらく見かけないと、「あの方はどうしたのかしら、元気にしているかしら？」などと気になることもあります。

この会誌からは、皆さんが文化やスポーツを生き活きとエンジョイしている様子が伝わってきます。それにも増して感心するのは、常に世界や社会に目を向け、その中でほっとスペースの活動をとらえていることです。できることならば、政治などという堅苦しいことは避けて通



国会議事堂を背に「障害者自立支援法」廃案！
(2005年7月5日国会議事堂前)

りたい、という方が多いでしょう。でも政治抜きに現状を変えていくことはできないのでは、と思います。

今、日本という国は不気味なほど、昔の軍国主義の時代に似てきています。政治の腐敗もひどいものです。血税を湯水のように無駄遣いし、私服を肥やしている輩が何と多いことでしょう。そのしわ寄せは、いつの世も弱者が負わされます。ですから、常に外に目を向けた皆さんの活動は、意義あることだと思います。

どうぞ、これからも仲間を信じ、希望をもって活動されますように。「ほっとスペース八王子」のますますのご発展を祈っております。

ほっとスペース八王子との関わり



賛助会員 原 田 俊 平

ほっとスペース八王子開所10周年おめでとうございます。「ほっと」の

ニュースは以前から読ませてもらっていましたが、会員の方々との直接の関わりがあるのは、ここ1～2年の事です。「10周年」という決して短くない期間、作業

所としてやりぬかれてきた会員・家族の方々と、献身的な活動を続けてこられた職員の方々に敬意を表します。

昨年、会員による作業所の自主運営のあり方をめぐって対立がありました。この事は障害者解放をめぐって、作業所の運営の考え方と具体的なあり方はいかにあるべきか、という問題であったと思います。賛助会として、どういう立場をとるべきかという課題がつけつけられ、それまで「ほっと」とは深い関わりのなかった私には色々考えさせられました。

現在、新プログラムのもとで動き出した「ほっと」は、「ニュース」を見ると活発な活動がなされており、「新たなほっとスペース八王子」として再スタートされ、嬉しく思っています。

私が賛助会員となったキッカケがいくつかあります。

赤堀闘争支援する会で、障害者差別に対して永い関わりがありました。そして、学生時代の友人であり、ほっとスペース八王子代表の堀部さんが発病し、それをのりこえて活動している事を知り、彼からの働きかけもあり、賛助会員となりました。病後の状況について、ほとんど私は知りませんでした。「ニュース」の「闘病記」で、彼が大変な思いをしながら頑張りぬいている事をはじめて知ることができました。

さらに、永年来の別の友人が4年前リストラを契機にうつ病となり、自殺してしまいました。反戦活動などで永年共に行動しながら、彼の発病後適切な対応ができず、自殺させないでも何とかあったのではな



「障害者自立支援法」を廃案に!! 1万余の全国の仲間たち
(2005年7月5日比谷野外音楽堂)

いかと今も悔やまれてなりません。

そして、自分自身かつて「人生八方ふさがり、絶望的、死ぬしかないか」と追いこまれた時があり、今考えてみると、あの時はうつ（病）状況になっていたのか、これまでの人達と同じ境遇だったのか、自分自身も同じだ、というような事が賛助会員となっただけです。

「ほっとスペース八王子」はこれからますます必要性が増してくる

なぜなら政府・政界・財界がこぞって人間性を破壊し、労働者の権利を奪い、人々が共に生きていくあり方を破壊し、「障害者」を大量につくり出している社会へと大きく転換しつつあるからです。その中で「障害者」として、社会の一員としてすべての人々と共に生きていこうと呼びかける場所が非常に重要な存在となってきます。反動的な社会のながれを根本から覆す力を秘めた存在ではないかと思います。

日本はすでに他国（イラクなど）と戦争体制に入っています。「人道支援」「国際貢献」と称して米英軍の占領軍に加担し、多くのイラク民衆の虐殺に加担し

イラク人民の民族自決権を破壊しています。これは「内政干渉」どころの話ではなく、「イラク民衆は国を治める力がない」などというおごりたかぶった「国家主権侵害」の典型です。

「人道支援」「国際貢献」と国会や新聞・テレビ等々で大々的に報道され、それが堂々と世の中でまかり通っている現実には心ある普通の人々の心を破壊せずにはおきません。

また国内では構造改革と称してリストラ・能力主義・成果主義・自己責任論が横行し、労働者の結びつきを破壊しバラバラにしています。公表されているだけでも失業者 300 万人、家族を含めると 1300 万人規模の困窮者をつくり出しながら「負け組」「自己責任」のもとに切り捨てられています。大企業・自衛隊などには国民の税金を膨大に使いながら、医療・介護・年金などの社会福祉が破壊されています。年間 3 万人、毎日 100 人もの人々が自殺に追い込まれながら、それらは「負け組」として切り捨てられ

るのは当然というこの社会が民衆の生活と精神をズタズタに引き裂かないはずはありません。こんな社会は私たちは望んでもいないし必要でもありません。これらのあり方に異を唱える「ほっとスペース八王子」のような活動こそ、今求められるものだと確信しています。

ほっとスペース八王子と共に進みます

先日「ほっとスペース八王子」ビルを久しぶりに訪問しました。バレーボール・ハイキング・愛知万博旅行・パソコン教室・ボウリング大会・卓球・映画鑑賞会や障害者自立支援法反対運動などが活発になされている雰囲気が伝わってきました。障害者の自主運営に向かったの様々なプログラムが実施され、着実にそれに向かって進んでいる様子を知ることができました。10 年やりぬいてきて、もう 10 年この「ほっとスペース八王子」を成長・発展させましょう。私も共にやっていきたいと思います。

ほっとはほっとらしく



私の居た頃は今の会員には、想像も付かない位、会員（正しくは『元会員』が）

我がまま勝手に、言いたい事は言い、やりたい事をやっており、自分のイヤな行

元会員・元運営委員 伊藤 喜久夫

事には全く参加せず、ましてや、ほっと職員、特に所長のHさんへの不平・不満で、丸で何事に関しても、ケンカ腰になる毎日でした！ 私は、中立を保ちたかった、言い換えれば、客観的な立場で本当は居たかった。ところが、現実には不平・

不満分子の言う事をウのみにし、あげくは、反Hさんとしての立場になって居りました。女性職員のNさんや、S・Sさんには、心配・迷惑を他の会員以上におかけしました。

私は、ほっとを退会して2年以上に成りますが、今のほっとの現状には、何かしら、落ち着き、言い換えれば、安どを覚えます。問題児だった私が言える義理では有りませんが、ほっとは、やっと本当の、本来の、ほっとに成りつつ有るのでは無いでしょうか？ 毎日のプログラムも、ニュースを見る度に、安定しているし、現会員の方々も、ルール、人間として最低限のルールを守っておられる様子がうかがえ、内心、私自身もほっとして居ります！！ 人生・人間、色々な、生き方なり、日々の過ごし方が有ります。（個性とは違った意味で！！）

ほっとを離れて、やっと中立・客観的に、ほっとを見る事が出来ます。

私の持論は、泣くのもただ、おこるのもただ、そして笑うのもただ、です！

同じ一生なら、笑って生きて行こうじゃ有りませんか？！

最後に成りましたが、ほっと設立 10 周年、おめでとうございます！

ますますの、ご繁栄、又、会員と職員の皆様方の、ご多幸、ご健勝を遠く離れたA市から、お祈りいたします！

ほっとにおりました頃は、本当にお世話になりました！

会員の皆様へ…何事にも自信と信念をもって、生きてください！ 石原都政は、その本質を、ますます表面化し、我々障害者は、ますます、生きづらい現実になって来ました。が、自分・自己の考えなり、思いを、行動化していきましょう！！

我々、障害者にも生きるケンリは有るのです！！！！！！

グッド・ラック！！！！！！

原 点

元会員 真 壁 里 実

私にとって「ほっとスペース八王子」とは、当事者活動そして自立心の原点だと思います。

私が「ほっと」に関係するようになったのは「ほっと」を立ち上げられたばかりの頃でした。多田さんをはじめとする心根の良い仲間や友人がいっぱいできました。

当初結成されていた「ヤングほっと」

の仲間と協力して、レクリエーションを企画実行したり、文集をつくったりしたこともありました。

また、心の病を持っていた自分たちで、というほっとの当事者主体の考えが私自身の自立心に強い影響を与えてくださったように思えます。この原稿を書いたことによって感謝の気持ちが生まれま

した。

長い年月がかかりましたが、30歳から
ようやくひとり暮らしを始めています。

私も苦労したこともあります、「ほっ

と」を10年運営されている方々も本当
にご苦労様です。

そして10周年おめでとうございます。

(^-^)

みなさんお元気ですか？

元会員 古 屋 真 理

この度は、10周年記念誌発行、おめ
でとうございます。

阿部さん、桜井さん、お元気ですか？
由美ちゃん、伊藤さん、宮田さん、お元
気ですか？ 平本君、お元気ですか？

皆とはもう逢って居ないけれど、あの
頃のほっとは心に焼き付いて居ます。

なっちゃん、エレクトーン頑張ってる
ますか？ みちよさん、元気ですか？
エレクトーンの方も、伸びた事でしょう。

私は今、就いた仕事も体調を悪くして、
病院のデイケアに通って居ます。

そこで学んだ、事を詩にしてみました。

一階段一

一つめの階段 早起き

二つめの階段 出逢い

三つめの階段 皆の温もり

四つめの階段 自分との戦い

五つめの階段 お風呂の温もり

六つめの階段 じゅくすい

七つめの階段 好きな人達の夢を見る

見えない階段だってある

これから

皆と笑い合った一時を忘れません。

これからも皆さん、元気で頑張ってく
ださいね。堀部さん、浜さん、お世話に
なりありがとうございました。皆さん、
どうもありがとうございました。

ピン芸人笑う内藤「ダァ！」

会員 内 藤 真 也



私がほっとスペー
ス八王子の設立 10
周年を振り返るの

は、正直言っているいろいろ良い事、つらい
事があり、今回限りで語ります。

開所式で、ヤングほっとスペースがシ



「ほっとスペース八王子」オープニングセレモニーにて
(1995年5月20日子安市民センター)

ンデレラの劇と、私の和太鼓を披露しました。

ヤングほっとの寸劇の練習は、多田氏も入れて8人で練習を重ね、ついには朝日新聞の取材となりました。ヤングほっとスペースはここから始まりました。

当時、1ヶ月に1回のほっとスペース八王子の定例会があり、ヤングほっとも1ヶ月に1回の定例会を設けました。定例会では、賞品がでるカラオケ大会では歌の好きな人が多いだけに、いくつかの賞を狙って、とても白熱し楽しみました。

私が特に思い出に残る活動は、バンド活動をしたことです。高徹さんの完璧な

ギターを中心に、ジュディマリの「くじら12号」を忘年会、八障連の例会に向けてひたすら練習を重ねました。本番では、うさぎや白鳥の着ぐるみ、桃山氏の女装など、今では定着したほっとの着ぐるみ集団の始まりでした。

私のほっとスペースでの10年を振り返っての感想は、活気のあるほっとスペースが自分にとって楽しめる場、というものです。私がほっとスペースを辞めていた時期、オープンスペース本郷町、PAO、多摩センターのデイケアなど転々としていました。そして思ったのが、私にはほっとスペースしかないということです。一番自分が輝いて必要とされている所なのです。

最後に、ヤングほっとスペースの活動は病気になってからの第2の青春でした。ヤングほっとを影ながら応援してくれた人達、ささえてくれた若いボランティアさん達、ヤングほっとのメンバー達、私のわがままでした。遅くなりましたが、この場をかりてごめんなさい。みんなありがとう。

なつかしいあの頃のほっと

会員 は る こ

まだほっとが生まれたての頃、集会所もありませんでした。1ヶ月に1度位、会員同志で連絡をとりあって、京王八王子駅の近くの喫茶店に待ちあわせて、茶話会をひらき交流を深めました。会員同



釣りの好きな仲間と釣り堀大会
(1996年)

志も新鮮でお互いに配慮もあり、とても良いかんじでした。あとは釣堀に集まって、鮎を釣り、それをお店の人がフライにしたり、焼いたりして美味しく頂きました。

した。まだまだ思い出はいっぱいありますが、私もまだ若かったし、仕事もしていたし、なつかしい心のアルバムです。

今の「ほっとスペース八王子」と、これからの10年を展望する

会員 阿 部 健 二



「ほっとスペース八王子」開設10周年、本当におめでとうございます。私が「ほっとスペース八王子(以下「ほっと」)」に、初めてやってきたのは、2004年11月の上旬の頃だったと思います。1ヵ月弱の体験期間を経て会員になったのが、11月の末のこと。それから気がつけば、あっという間に、8ヶ月たってしまいました。

最初の頃は「ほっと」に通うことだけでも精一杯だった私ですが、次第にプログラムにも慣れてきて、外出する自信も、体力もつけることができました。

今年の4月からは、「ほっと」の運営委員もやらせていただいております。

もし、今の私が(自分にとって)「ほっと」とは、何かと聞かれたら何と答えるでしょうか？

たぶんその答えは「居場所のひとつ」であり「訓練の場のひとつ」であり「日常生活の一部」と答えるのではないのかなあと思うのです。

「ほっとスペース八王子」が「共同作

業所」である以上「何か作業をするべきなのではないのか」という意見があるのも、複数の方から伺っております。しかし、現在実際に所属する立場から、この場をお借りして、現在、そして今後の「ほっとスペース八王子」のあり方を、提言させていただけたらと思います。

今の「ほっとスペース八王子」は？

今(2005年7月現在)の「ほっとスペース八王子」は、プログラム制をとっております。けれども、「作業所」という言葉からイメージされるような「作業」は、現在行っていないのが、現状です。もし「作業」をしてしまうと「作業に追われてしまう」状況になってしまうからなのだろうなあというのは、容易に推察できるのです。そのことは、市内、都内にある「作業所」の皆さんの現状を見ていただければ、一目瞭然だと思います。つまりどういうことかということ「作業に追われるあまり」に「各会員の状況が把握できない」「日々の作業の内容、実績でしかその会員の状態を判断できない」



八障連総会で「障害者自立支援法」反対の取り組みを要請
(2005年5月21日子安市民センター)

と言う状態になってしまうのではないかなあと思われるのです。

社会参加の場としての 「ほっとスペース八王子」

今、「ほっとスペース八王子」に所属している会員さんを見てみると、正直申しまして、現時点では「一般就労」が難しい方がほとんどだというのが、現状です。もちろん「一般就労」だけが「社会参加」の方法ではないと思いますが、「精神障害者」の中には「働けるものなら働きたい」と思っている方が、比較的多いのではないかなあと思うのです。しかし、実際に働いてみると社会の枠組みが「精神障害者」に対しての偏見も根強く、「仕事に対する結果」だけでしか「仕事に対する評価」にならないため、「働ける能力がない」と思われてしまう世間の風当たりが強いのが現状だと個人的には思います。

そのための「訓練の場」として、「作業」をすべきではという話が出てくるのは、言わばごく自然のことなのかもしれません。しかし、各会員さんの病状、能

力などに、個人差がありますし、先述の通り、「作業」をしないかわりにできる「日常生活支援」などがたくさんあると思うのです。

パソコン・携帯電話・エレクトーン・モノポリと言うカードゲーム・ビデオ鑑賞会・スポーツ・勉強会・夕食会などなど、ひとりでは体験することが出来ないことが、ここ「ほっとスペース八王子」では、会員自身のやる気次第で、いくらでもやることができるのです。

もちろん、誤解のないように、現在の「ほっとスペース八王子」のあり方が、このままでいいとは思っているわけではありません。しかし今の「ほっとスペース八王子」にしかできないことって私はあると思うのです。

「ほっとスペース八王子」がそもそも「精神障害者」の地位向上、権利擁護の視点から出発している団体だからこそできることってあると思うのです。

障害者自立支援法に対する 各団体の温度差

先述させて頂いたとおり、今年の4月から「ほっとスペース八王子」の運営委員をやらせて頂いている関係上、市内の障害者団体の会合に参加する機会なども、何度かあります。その席に参加させて頂いていて当事者として感じるものが、「当事者」と「施設職員」との間の「温度差」が若干見られるのではということです。そのことを一番痛感したのが、今国会で審議中の「障害者自立支援法」に

関する各団体の対応(特に職員サイドの)です。

「障害者自立支援法」という法律の論議をきっかけに、今まで障害者をはじめ、一般市民の目に見えなかった「障害者福祉」に対する政府の「対策の遅れ」が、様々な形で露呈されてきました。

精神障害者だけに限定しても「通院医療費公費負担」の「負担増」など、問題は山積みです。しかし、「法案の中身がよくわからない」「共同作業所は(小規模授産施設を除き)障害者自立支援法の影響を受けることはないので、大丈夫」などと言った話を耳にすることがあります。

はたして、これでいいのでしょうか? 「法案の中身がわからないのであれば、中身がわかるように勉強すればいいじゃないですか」「仮に自立支援法の影響を(直接は)受けることがないとしても、当事者の生活が脅かされる現実はまだない事実なんです」と思うのは、私だけでしょうか?

作業所の職員さんは、自分自身の生活もあるでしょうし、作業所における「職員」という立場から、作業所の「運営」がなりたつかどうかにもどうしても視点が行きがちだと思います。そのことは、理解できますが、「作業所」というところが、そもそも「誰のために」存在するのかという原点に、もう一度立ち返って欲しいと私は思うのです。

こんなことは、新参者の私に言われなくとも、わかっていると仰る方もいらっしゃるかもしれません。



「障害者自立支援法」反対の「ほっとスペース八王子」第一波行動
(2005年4月8日国会議事堂前)

人口減少と社会福祉

別の観点からお話させていただきますと、日本と言う国を見ても、2007 年を境に、団塊の世代の方が、大量に退職される「2007 年問題」が、昨今マスコミ各社でとりあげられているのは、ご存知の方もいらっしゃると思います。と同時に、「ニート」と呼ばれる「若年未就労者」の人口が百万人いるとの試算も出ています。

また、教育の現場をみても「ボランティア(奉仕)」が履修科目として、取り上げられたりしていることをみると、今後の日本社会のキーワードは「社会福祉」の分野であることは一目瞭然です。

しかし、その一方で、医療費(特に高齢者)の増加、老齢年金の負担増、障害年金の減少、介護保険の導入(及び改正)、今後予想される税収減。これらの要因により、「ほっとスペース八王子」も含まれる「小規模共同作業所」が今後も生き残っていくためには、やはり何らかの形で「授産施設化」を目指す必要があると私も思います。

けれども、現在の法的枠組みでの「社会福祉法人化」には、私個人の私見として「強い抵抗感」があるのです。というのは、現行法ですと「社会福祉法人」は、官公庁に認可を受けている関係上、常に官公庁の監視下に置かれる懸念があるのです。さらには、官公庁に提出する必要のある莫大な書類を処理するために、今いる職員の一人を「事務専従」として配置せざるを得ないというジレンマも抱えています。

ただでさえ、一人から三人ぐらいの常勤職員で行っている作業所の職員のうちの一人を「事務処理のためにだけ」配置せざるを得なくなったら、会員に対する心のケアなど到底出来ないのではないのでしょうか？

話が、だいぶ膨らみすぎたので、本筋に戻します。

今後の「ほっとスペース八王子」 のあるべき姿は？

このような状況を踏まえて、では、今後の「ほっとスペース八王子」はどのようにしていったらいいのでしょうか？

まず一点は、後継者の育成だと思います。現在の「ほっとスペース八王子」は、職員三名（うち所長が代表兼任）、運営委員長と運営委員（私を含め会員から選出）二名の計六名の体制で運営しています。しかし所長の年齢が（本人には失礼ですが）50代の後半であることを考えると、あと数年以内に、次の所長を、育成しておく必要が急務なのではと思っています。

次の一点は、授産施設化です。これに関しては、障害者向けの旅行事業への参入など、論議を進めているところです。

あと一点は「できる限り今の規模の予算を維持したい」ということです。しかし、通所者実績に基づいた補助金頼りの現状のままですと、この点に関しては、非常に厳しいものがあると言わざるを得ません。

10年後の「ほっとスペース八王子」の構想をたてることというのは、難しいものがあるかもしれませんが、来年春の定期総会の時点までには、運営委員会などで論議を重ね、明らかに出来たらと思います。

感謝の言葉

会員家族 橋 本 明 子

「ほっとスペース八王子」開所10周年、おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

「ほっとスペース八王子」を現在まで築き上げて来られました、この10年間には並々ならぬご苦労が、おありのこと

と思います。

息子は、一昨年4月に籍を置かせて頂きまして、それから2年余りになります。いつも大変お世話になりまして、本当に有難く思っております。体が大きい割に気が小さく、温かいお言葉、お心遣いを頂きながらも、対人関係で行き詰ったり致しますと、精神的に不安定な状態になって、思うように通えなかったり、途中で帰宅したりしてしまうこともあります。焦らずに見守って行きたいと思います。

プログラムの中でエレクトーン教室に

参加しまして、少しずつエレクトーンが弾けるようになって来たことは、息子にとって大きな喜びとなっていることと思います。「ほっとスペース八王子」で学んだことを日常生活に於いても実践し、自立する方向に向けていかなければ、と思っております。

また「ほっとスペース八王子」に通うようになって友達が沢山出来たことも有難く思っております。

これからも何かとお世話になることと思いますが、どうかよろしくお願い致します。

お仲間に入れて頂き

会員家族 林 みち

開所10周年をお祝い申し上げます。

10年の間には多事多難な事もお有りであったとお察し致し、今日を迎えられた事に敬意を表したいと存じます。

私事、10年以上も引きこもりの子が縁あって、ほっとスペースのお仲間に入れて頂ける機会を得ました。初日は、本人も家族も共に1日もつかと思いましたが、2日目以降本人が進んで出掛けて行きました。外に出られるように成った事

を、とても嬉しく感謝致して居ります。

何が一番嬉しいか聞きましたら、パソコンとスポーツとの答えに又驚かされました。今迄のカラから抜け出せたのは、職員の方々の気配りに依る、ほっとスペースの雰囲気ではないかと、重ね重ね感謝して居ります。

今後も益々御尽力頂ける事を願いながら、お祝いの言葉とさせていただきます。



最近うるさい娘

会員家族 林 せつ子

ほっとスペース八王子 10 周年記念おめでとうございます。林麻里の母です。

麻里も、ほっとスペース八王子にお世話になって一年が過ぎました。

ほっとスペース八王子が出来た 10 年前、うちの娘は仕事をしないで家に閉じこもり状態で外に出ることもやっと動いた状態でした。

でも、去年の 2 月にソフトバレーボールのボランティアやっていた時には、やる気が無かった娘も、やる気が出てソフトバレーボール練習日には楽しく行って

たようで、普段暗い娘が明るくなりました。

6 月中旬に娘からほっとスペース八王子に通いたいと言う話が出て、少しは、うちに居るよりいいのではないかと思い、行かせました。

どうせ、一週間で辞めると思ったのですが、あっという間に一年が経ってしまいました。今では家に居てもうるさいぐらいです。

これからもうちの麻里を宜しく願います。

10 周年おめでとうございます

支援者 土 橋 幸 一



私と堀部さんは同じ職場で 10 年間ともに働いてました。堀部さんは少し変わった正義感の持ち主です。はじめは堀部さんの呼びかけで、夕食会に参加して、会員の皆様と数回の夕食づくりが出会いの最初でした。いろいろな悩みを持ちながら、前向きな生活を求めて真剣に取り組む姿がありました。政府とはいつも戦いの連続で、行き詰まりを心配したときもありました。その後北海道旅行にドラ

イバーで参加して多数の人達との交流ができました。

私の人生の中での思い出として時々懐かしく思います。堀部さんとは 20 年の交際ですが、これまでの活躍は大変素晴らしいことと感じてます。会員の皆様の協力があつての事です。これからも各行事に参加して交流したいと考えてます。秩父で会いましょう。

重ねて 10 周年オメデトウ。

現状を総括し、さらなる発展を！



ほっとスペース八王子 運営委員長 植 松 恵 樹

10周年おめでとうございます。ほっとスペース八王子（以下「ほっと」）の設立の経過や、設立趣旨、何をめざすか、等々については、入会時の説明や日常の活動、プログラムなどにも生かされていて、会員のみなさんが知っているとおります（支持するかどうかは別として）。また職員の方々は、面接時や作文提出などで知っていると思います。毎月発行されているニュース内容にも、その事は反映されていますので、他の作業所やニュース読者の方々にも知れわたっていると思います。

それが、好意の眼で受け止められているのか、好奇の眼で受け止められているのかは、定かではありませんが。まあ、十人いれば、十人の意見があるのですから、見方も様々です。それでも「ほっと」は「わが道を行く」、という所でしょうか。

私もニュースなどに原稿を書いているので、内容も重複するかも知れませんが、意見をのべたいと思います。

まず第一に、準備段階からの、多田氏、佐藤氏、堀部氏ほか、労働組合関係者及び支援者の皆様の努力—人的・財政的—（そのほか多数の）なしには、現在の「ほっと」は存在しないという事です。

これらの人々の当初からのご苦労は大

変なものだったと思います。現在は関わっていない方々もおられますが、まず、この事を忘れてはならないと思います。それ以降の支援者のご協力、ボランティア、家族、通所メンバーの協力があってこそ、「ほっと」が現在まで続いているのだと思います。

たまり場からの飛躍を

その事をふまえ、私なりの提言をのべたいと思います。当初の「たまり場」、「ほっとできる場所」からのもう一步の飛躍が求められていると思います。内容的には、個々の通所メンバーに合ったプログラム等にする事は言うまでもありません。20代、30代のメンバーの最大の課題は「就労」だと思います。その事の取り組み。また、自立生活へのプロセス等。そして、ともすれば作業所という空間の中で生じる、管理する側（職員）、される側（メンバー）という関係性の革命的改善も必要だと思います。「この国



地域の労働組合との交流芋煮会
(1997年10月26日多摩川河川敷)

に生まれたる不幸」という言葉を思い出しましたが、病者が作業所でも、管理の対象とされたり、いやな思いをするという事は考えたくもありません。

具体的内容は、ニュースなどに書くことにしますが、さいごに以下の点をのべ、皆さんに考えていただきたいと思います。

様々な実践からまなぶ

① 北海道の「べてるの家」の実践から学ぶ。何冊も本になっています。この中の病者の実践、向谷地氏などの取り組み、実践はまさに、革命的と言えるもので、大いに学ぶ必要があると思います。

② これも、北海道ですが、札幌の「共生舎」という団体の岩渕氏の言葉から。

「他の施設や作業所で面倒を見切れなくなった人間がうちに来る。口じゃなくて、手を動かせ、他の作業所ではそう教える。学校もそうだ。しかし、うちはそうじゃない。どれだけ口を動かすか、だ。どれだけ新聞を読んで、テレビのニュースを見て中身を理解させ、どれだけ世の

中の出来事を分かってもらうか。世の中との折り合いというのは、そこからしかつかない。単純作業がこの人たちは得意だ、飽きずにやる、と他の施設の職員は言う。ほんとうにそうか。そんな人間がいるか」

（「自閉症裁判」ー レッサーパンダ帽男の「罪と罰」ーより）

この岩渕氏の言葉からも学ぶべき事は多いと思います。

③ 堀部代表が常々考えている事と思いますが、会員、職員の中から、次代の「ほっと」を担う人たちを作る、ということが課題だと思います。但し、「課題」、「方針」などと言っているうちは、真の後継者は生まれません。肩の力をぬいて、日常の中で信頼関係、人間関係を作っていけば、自然とすばらしい人々はあらわれるものだと思います。

私自身もほっとスペース八王子と10年の付き合いになりますが、これからの発展を考え、長く関わっていきたく思います。若い人のジャマにならないように。

働くことはいいことだ



「ほっとスペース八王子」会計監査 宮島正子

「ほっとスペース八王子」10周年おめでとうございます。

「継続は力なり」といいますが、日々の着実な歩みが10周年を築き上げたことに、心からエールを送りたいと思います。

さて私は、学校を卒業して、普通に就職するという人生を送ってこなかったからでしょうか？

「働くこと」「自分の口を糊するということ」にこだわり続けています。現在はIT関係の仕事に携わっていますが、私のわかる範囲でのご提案をしたいと思います。

「ほっとスペース八王子」の明確な就労方針については、承知していませんが、私の知る限りでは、あまり積極的な姿勢は見られません。

一般的な作業所のイメージは、単純作業イコール低賃金のようなのですが、あまり固定観念にとらわれず、一步踏み出してみるのはいかがでしょうか？

〈その1〉

毎日の食事会はメインプログラムの一つなので、もう少し特色を出して、いっそのこと畑を借りて野菜から作ってみたらいかがでしょう？

特にこの時期、新鮮な夏野菜の美味しさは格別です。真っ赤に熟したトマトの甘さや、もぎたてのナスやキュウリの歯ごたえは買ったものでは絶対に味わえません。

身体を動かす土いじりは、リフレッシュには最適です。無農薬で安心の上、採れた野菜はタダとなれば結構魅力的だとは思いませんか！

多少キュウリが曲がっても、菜っ葉を虫がかじっても、自らの手で作った野菜の味は格別です。

〈その2〉

いわゆる内職のような辛気くさい仕事ではなく、せっかく何台ものパソコンがあり、通信環境も整っているのですから、何かパソコンを使ってできる仕事はありますか？

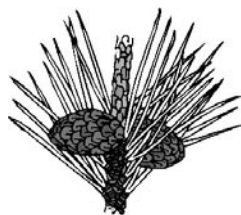
e-JAPAN 構想といって、行政などを中心に文書の電子化がすすめられていますが、セキュリティなどの管理の方法さえキチンとできれば、ゆるやかな納期の仕事などもいっぱいあるはずです。

これまであまりパソコンに興味がなかった人も、データ入力などの仕事を覚えれば、パソコンのスキルも上がり、いろいろ便利にもなるでしょう。いきなり多くの収益を望むことはむずかしいでしょうが、少し軌道に乗れば、旅行代の足しになったり、飲食を伴う行事の原資ぐらいにはなるはずです。

「面倒だ」「たいへんだ」「職員に負担が増える」etc. とやらない理由は山ほどあるかもしれませんが、「自分自身で稼ぐお金も大切なことだ」と思います。

私がお手伝いできることなど微々たるものですが、せめてこの一文が、議論のきっかけにでもなれば幸いです。

以上、差し出がましいかもしれませんが、日ごろ気になっていることでした。よろしくお願いします。



「ほっとスペース八王子」開所10周年、おめでとうございます



「ほっとスペース八王子」賛助会代表 岡 口 雅 子

「ほっとスペース八王子」とは、前身の「八王子・赤堀さんと共に闘う会」を含めて、もう15年以上もおつきあいしていることになります。山あり谷ありで、何度も何度も解散、閉鎖かと心配しましたが、よくもまー続いたなと思います。

まず最初の難関が、1995年開所当時の財政的な問題でした。開所したと言っても、うまく行っても最低一年間は家賃賃貸料、職員の人件費、運営費共に自己資金で運営せざるを得ず、下手すると何年間も自己資金で運営していく覚悟が必要だったのです。幸い、開所した年の10月頃に助成金が下りたそうではあったのですが、当時、まだ福岡に居ましたので、何のお手伝いも出来ず、せめて財政面の援助だけでもと思い、カンパをしていました。私以外にも沢山の方々がカンパで財政的に支えて下さいましたが、これが賛助会の始まりです。

開所当時、私自身は東京に住むなど考えていませんでしたので、「ほっとスペース八王子」のニューズレターと今は連れ合いになった堀部の話から「ほっとスペース八王子」の様子を聞くだけでした。1996年に病気になり入院しましたが、堀部は、仕事も「ほっとスペース八王子」も休んで一ヶ月間、福岡の私の側

に居てくれました。入院した時の辛さが分かっているからだとは思いますが、とてもありがたかったです。これをきっかけに、1997年に堀部と結婚しました。二人とも歳を取っているのも、内輪だけで結婚式を挙げようと話し合っていたが、当時代表だった多田さん、現在運営委員長をされている植松さん、会計監査役の宮島さん、堀部の職場の労働組合の執行委員長だった枡本さんらの計らいで、祝う会をしていただきました。「ほっとスペース八王子」からも沢山の会員が出席して下さいました。思い出になるビデオも作ってくださり、ありがとうございました。

2004年5月に賛助会が正式に発足した時、開所当時からのご縁で賛助会代表を引き受けましたが、仕事が忙しく、なかなか「ほっとスペース八王子」の行事にも参加できませんでした。今後は、もっと時間を作らなくちゃと反省しています。これからも「ほっとスペース八王子」応援団の一員として、応援を続けていきたいと思っています。よろしくお願いします。



現職員の立場から

ついに来た僕らの時代

所長 堀 部 正



「ほっとスペース八王子」が設立して今年で10周年。その前身は八王子・赤堀さんと共に闘う会。無実の「精神障害者」死刑囚・赤堀政夫氏を取り戻そうと八王子で作られた「八王子・赤堀さんと共に闘う会」は八王子の「精神病患者」を中心にした運動体だった。駒木野病院の心理室長の佐藤和喜雄氏を代表に作られたこの会は八王子地域の「精神病患者」の集いの場でもあった。代表の佐藤氏の誠実な人格と人脈もあって福祉関係の労働組合、市民運動そして精神医療従事者などの個人の支えで事務所を持つことができて、そこがたまり場になっていた。

例会や会議だけのための場ではなく、会員相互の意見交換、情報交換の場でもあった。しかし、あくまでも赤堀氏を取り戻す運動を主にしていたので、なかなか地域の「精神病患者」の生活や悩みに肉薄できるような活動は難しかった。

天皇制弾圧とのたたかい

特筆すべきは、1988年末から1989年にかけてヒロヒトが死の淵をさまよっ

ていた頃、警察権力による家宅捜索などの脅しや監視の中でも赤堀闘争を貫き通す佐藤氏の毅然とした態度。その中で、闘う会の仲間の動揺や体調不良を調整しながら、赤堀氏を無実に向導するための最大限の取り組みを進め、闘う会を運営していく佐藤氏から多くのことを学ばせていただきました。

1989年に赤堀氏を無罪で取り戻してから、地域で孤立している仲間たちや、精神病院でいまだに退院出来ずに苦しんでいる仲間たちとの交流を進めていこうと考えていました。

そしてその考えが「ほっとスペース八王子」設立へと向かわせたのです。1993年頃のことでした。

行政から補助を受けるか否かの議論

行政（おかみ）から補助金をもらって活動することにはかなり抵抗もありました。それまでは支援の労働組合、市民団体や個人の寄付金を中心に自分たちの生活費の一部を会費として会に収めて、それを活動資金にしていたからです。

行政から補助金をもらって活動するのを納得するまでにかなりの時間の議論が

費やされました。しかし、残念なことに支援する労働組合、市民団体も赤堀氏が取り戻されると潮を引いたように寄付金が滞っていきました。会員の会費も月一万円という頃もありました。身の丈に合った活動で良いじゃないかという議論もありました。こじんまりと「ほっとスペース八王子」に集えた自分たちだけでひっそりと活動していければ良いじゃないかと。

結局、行政から補助金を受けながら活動をしていく場合も、「ほっとスペース八王子」は全国レベルで「精神病者」を対象にしている自立解放センターだということを忘れないようにしようということで、全国に支援を訴えて自己資金を確保し、借金を募りました。

その結果、1995年3月に西八王子駅近くの台町にワンルームマンションの一室を確保し、4月から活動を開始したのです。その過程であくまでこじんまりと活動して行きたいという初代代表や一部の会員は「ほっとスペース八王子」から離れていきました。

自己資金・借金を確保しながらもいつまで続くかという不安はありました。当時の東京都社会福祉振興財団が「ほっとスペース八王子」の「精神病者」自身による運営という趣旨を理解し、新鮮味を受け入れてその年の10月に助成の決定をしてくれたので、早速、千人町の一軒家に移りました。台町の部屋は7畳あまりの狭い空間でそれも理由の一つになって、一人の会員を焼身自殺に追い込んだことがあったからでした。

いろいろありながらもその実績で、翌年の4月に遂に八王子市も共同作業所として「ほっとスペース八王子」に対して補助金を交付することを認めました。「精神病者」自身で運営する先輩たちの援助もあって遂にスタート出来ました。愛媛の「ごかい」、京都の「前進友の会」、藤枝の「藤枝友の会」のみなさん本当にありがとうございます。それにつけても多田代表の当時の苦労は大変なものがあったと思います。ラディカルな活動をする「精神病者」の自主運営の作業所ということではいつでも閉鎖される恐れを持ちながらの運営だったからです。それはいまでも続いています。

「精神病者」自己解放の初心をいつまでも

「たまり場」としての実現が一定できて、次は「独立して一人暮らしできるようにする場」としての「ほっとスペース八王子」という議論でまた大きく意見が分かれました。自主運営の考え方をどう捉えるのかという問題だったのです。単なる自立生活ということであれば、それは「社会適応者」でしかありません。そもそも「ほっとスペース八王子」は「健常者」のために「健常者」に迷惑をかける存在として「精神病者」を差別社会に適応させる場なのかということです。一定程度の自立生活が出来る仲間は「小難しい、面倒なことは嫌だ」「スポーツさえ出来ればいいんだ」「政府が何しようと、俺には関係ない」「自分が楽しければいいんだ」という考えの会員が運営

委員となり、職員や他の運営委員は設立時の初心、理念を貫こうと頑張りました。その過程で多くの職員が対応に苦慮し、体調を崩して辞めていきました。

「自立生活力」を身に付けていく過程はきわめて大事なことです。「社会適応訓練」ではなく「社会を『精神病患者』が生きていけるものに変革させる」ために一旦は「社会に適応」する練習をする。そして次に適応できた仲間と適応出来ていなくてもそのあるがままの姿を突きつける仲間との共同作業で「健常者」に「精神病患者」の想いを伝えることが必要なんだということでプログラム制を取り入れ、軌道に乗り始めました。そこに「障

害者自立支援法」が登場したのです。

これは「ほっとスペース八王子」にとってタイムリーな好機でした。初心を実現する、設立時の理念の実現出来る時代が到来したと思いました。いまこそ「社会を『精神病患者』の側に適応させる」ために共に頑張れると。

こういう時代だから「ほっとスペース八王子」はいずれは行政からの補助金も打ち切られ、閉鎖されるかもしれない。私たちは開設した初心の立場＝「精神病患者」の立場からより好ましい自分たちなりの在り方を今後も模索して全国の仲間と共に大きな夢を実現するために頑張ります。

現在、そしてこれからの「ほっとスペース八王子」



職員 井田 有哉

私は2005年の2月から、「ほっとスペース八王子」（以下「ほっと」）に職員として関わらせて頂いております。今年は「ほっと」が開所して10年ということで、大きな節目に職員として関わることができるのを、とても嬉しいと感じております。（多少《？》のプレッシャーも感じてますが…。）2005年という年は「ほっと」にとっても節目であります。日本の精神保健福祉にとっても、大きな一年であると思います。まず、「障害者自立支援法」（以下「自立支援法」）

という法案が上程され、衆議院を通過するということがありました。「自立支援法」については、ここで詳しく述べる必要がないほど、皆様もご存知のことと思います。この法案は、今回の衆議院解散と共に廃案になりましたが、日本の福祉の根底を覆すような、こんな悪法が実際に成立するかもしれない可能性が、今なお続いております。また、「心神喪失者等医療観察法」が今年の7月15日に施行され、実際に「心神喪失者等医療観察法」を適用して検察当局が起訴し、裁判所も次々と起訴を受け入れて裁判が行なわれ続けています。ここ八王子でも第一

号適用者が出ています。「再犯のおそれ」などという不確実なもののために、隔離や観察が行なわれようとしています。

無知と未熟

私は「ほっと」に関わるようになるまで、人権問題を深く考えることがありませんでした。また、身近に感じる機会もありませんでした。苦しんでいる人々の声に耳を傾けたり、社会問題の集会に参加することはありませんでした。今日までの7ヶ月は、デモや集会に参加する度に新たな発見があり、驚きと憤りの連続でした。これまでの自分を恥じると同時に、自分の目を開けてくれた「ほっと」に対して感謝をしています。

このような私が、これからの「ほっと」についての考えを述べるのは、これまで「ほっと」に関わってこられた方々に対して、失礼ではないかと思います。また、現在の自分の考えに対して、自信を持つことができていません。何か意見を言うのは非常に心苦しいです。でも、今の段階の自分の意見として、少し述べさせて頂きたいと思います。

プログラムとは

まず、現在の「ほっと」には（作業所の制度に基づいての考えになってしまいましたが）、プログラム制・運営の問題、会員の方の参加率の低下、登録会員数の減少、いろいろな問題を抱えていると思います。私は中でも、プログラムについ

て考える機会が多くあります。現在でも試行錯誤しながら、いろいろなことを試験的に行っています。プログラムは、会員の方自身の達成感や充実感を得るのに貢献しているとは思いますが、別的一面では制約で会員の方を縛りつけていたり、会員の方との話し合いや賛同をもとに決めてはいるものの、職員からの押し付けであったりはしないだろうか、ということを考えます。作業所の位置づけが、医療と地域を結ぶものである以上、地域への入り口として、社会生活や就労などを意識したプログラムが運営されています。社会での約束や制約に近いものを作業所で設けて、実際に取り組んだり、練習をしてもらえるのは、良い機会であるとは思いますが、しかし、これらを良しとする考えは、あくまでも職員の視点から考えたものです。特に「ほっと」の場合は当事者運営です。果たして、会員の方々にとって、本当に良いことなのかどうか、自信を持つことができません。プログラム制の一番大切なところは、いかに魅力的なプログラムを用意し、いかにそのプログラムを会員の方のために運営していくか、ではないかと思います。最近の話し合いや取り組みは、その大事ではないところで議論が行われているような気がしてなりません。もちろん、制約や決まりがあって、はじめてプログラムが成立する、という部分を見捨てる訳ではありません。しかしながら、職員としての取り組みや、最近の話し合いの傾向について、責任を感じています。少しでも魅力的なプログラムの提案、会員の

方にとって良いプログラム運営ができるよう、今後とも会員の方々と話し合っていきたいと思います。試行錯誤していききたいと思います。プログラム制が始まって1年と3ヶ月。まだまだこれからだと思います。

自活の道

そして、これからの「ほっと」を考える上で、簡単なことではないと思いますが、自活の道を探る必要があるのではないかと、私は考えます。

「自立支援法」は一応、廃案になりました。しかし、政府はこれからも継続して「自立支援法」と同じ内容の法案を提出する旨を発表しています。ここ最近の状況を鑑みても、福祉に対して十分な保障がされるとは思えません。そのために解放運動を続けなくてはならないと思うのですが、「ほっと」の場合は運動と共に、みんなの居場所であり続ける必要もある、と私は考えます。確かに、何も持っていなくても運動はできますし、運

動とは本質的にそういうものだと思います。だからといって、現在の居場所がなくなって、それが会員の方にとって良いことだとは思えません。行政をあてにすることができないのであれば、自分達で居場所を守る必要があるのではないかと思います。それには、行政の取り決めなどで左右させられないよう、自分達で「ほっと」を存続させていくのが一番確かだと思います。自分達の居場所があって初めて、自分達を含めた解放運動を行えるのではないのでしょうか。特に「ほっと」の運動については、そのように考えております。

自分では具体的に考えられていないことや、努力できていない部分について述べてしまいました。また次の10年を迎える時、自分としてもっと具体的に考えることができ、行動しているよう努めたいと思います。「ほっと」の運営が今より良いものであるように、サポートしていきたいと思います。当事者運営の「ほっと」として、自分がどうあるべきか、考え続けたいと思います。

情報「障害者」から脱するために



職員 浜 光 宏

私が「ほっとスペース八王子」の職員となって早3年の月日が流れた。その間、実にたくさんのことを学ばせても

らった。もともと福祉畑とはまるで違う世界で生きてきた私だったが、「ほっとスペース八王子」の職員となることで、日本の福祉が抱える様々な問題について考えさせられることとなった。学生時代

に手話サークルに入っていた私は、聴覚「障害者」の抱える問題については、常々当事者たちから聞かされていて、当時はインターネットも携帯電話も無かったから、情報を得るのに人一倍努力を必要としていることを知った。「健常者」が耳を通じて苦も無く得られる情報を得ることが困難であることから、情報「障害者」という言葉を使っていた。

ほっとの情報「障害者」

「ほっとスペース八王子」の職員となつてからは、精神「障害者」の抱える問題について知られることになったが、長い間入院生活を強いられてきた方々は、聴覚「障害者」とはまた違った意味で、情報「障害者」であると思った。社会から隔離され、社会的な経験を十分に積めなかった方々は、社会生活をする上で必要な情報を得るやり方を十分に学んでおらず、非常に限られた情報で多くの判断をせざるを得ない状態なのだと思った。そのため周りの人とのコミュニケーションを上手く取れず、孤立し引きこもることになってしまう。「ほっとスペース八王子」は、そんな悪循環を断ち切って、そんな方々に社会生活を送るための様々な情報を提供するところだと思う。その情報は、生活の基本となる衣食住を成り立たせるのに必要な情報から、人と人との付き合い方といった複雑な情報まであるが、「ほっとスペース八王子」は主にコミュニケーションの取り方に重きを置いて情報提供していると思う。週に数回

の全体ミーティングや月に一度のやんわりトーク、会員間でトラブルがあれば、すぐに全体ミーティングを開き皆で話し合う。そういった数多くのミーティングを通じてメンバーたちは、自分の考え方をまとめ、それを人前で発表したり、人の意見に耳を傾けたりする練習をしている。この練習は、長い間入院生活をしてきたメンバーばかりでなく、ほとんど入院をしたことのないメンバーにとってもとても重要で、多くのメンバーは、社会生活の人間関係の中で発病した経緯があるため、ミーティングを通じてより良い人間関係の結び方を学ぶことで、より良く社会に対して自分を表現することができるようになっていくものと思う。

「ほっと」できる場の提供

これからの「ほっとスペース八王子」のさらなる発展を考える時、「障害者自立支援法」のような否定的な要因も生じてくる事は予想されるが、それでも地域に生きる精神「障害者」たちにとっての「ほっと」できる場の提供を貫いていく限り、必要とされ続ける事と思う。従って、我々職員は単に現在のプログラムで満足することなく、一人一人の利用者のニーズにきめ細やかに答えるべく、多様なプログラムと各人のカリキュラムをも考えていかなければならないと思う。そうして、少しでも多くの情報「障害者」がいなくなるように努力し続けていきたい。

精神障害者
たちが運営

「ほっとスペース八王子」オープン

オープニングセレモニーで披露する劇
「シンデレラ」のけい古にも熱が入るこの春には八王子市富士森公園で、恒
例のお花見もした

心の病いをもつ「精神障害者」で運営される「ほっとスペース八王子」が、八王子市で生まれ、入院経験のある多田進夫さん（代表）が「精神科医や医療従事者に頼らず、自分たちが主体となって仲間を助け、自立と自活をめざした空間と場を作る」と、2年前に呼びかけたのがきっかけだ。

西八王子駅南口から歩いて5分、明野ビル3階、20平方メートルのワンルームが「ほっとスペース八王子」だ。20日のオープニングで上演する「シンデレラ」劇のけい古の最中だった。花嫁探しに王子が、地下足袋を持ってきたりの爆

笑劇、狭い部屋はヤングの熱気であふれていた。台本はメンバーの桃山桃源さん（ペンネーム1122）が書いた。桃山さんは1日4時間のパートで、紙の裁断をして、緊張が長く続く、黒いものが怖くなる幻覚症状がある。まさに命の電話だ。メンバーは20～50代30人（同市在住者が中心）。今まで料理教室、ハイキング、水泳、家庭訪問、心の悩み相談と活発に活動してきた。いずれも会場を借りての活動だったが、事務所を持ったことで、心の悩みの相談、就職、

自立・自活めざす「空間」に 協力者や賛助
会員を募集

あせらず、欲ばらず」だ。会議・作業は2時間以内で切りあげている。ハイキングなどにも時間の余裕をもって計画をたてる。

女性部は、互いに訪問しあつて食事を作り、食べること

住居がし、家事支援の活動の輪は広がっている。

「これらの活動を通して私たちの結びつきを強め、健康者・市民の協力を得ていきたい」と多田さん。

運営の基本は「あわてず、

病状が安定して、本人が退院を望んでも退院許可が出ない場合は、多田さんたちは「退院を進めるための手助け」や、引き受け手、アパート、職探しの援助など、自立のための協力を始めている。退院しても自分の病を打ち

で症状を軽減させることもつながっている。

入院患者の中には、社会的条件が整えば退院できる人が多くいる。退院しても受け入れてくれる家族がない、自活したいが住居がない、職がない、家事になれていないので生活できない、地域住民の差別・無理解で働けないなどと訴えている。

開けられず、ひっそりと暮らしている人たちにあって、ほっとできる心の拠りどころができた期待されている。

同会では、入院している人、家族と暮らしている人の仲間を募集している。会費は無料。精神医療従事者、健康者の学生ボランティアなどを支えてくれる賛助会員も募集している。賛助会費は1口、月1000円。

「ほっとスペース八王子」オープニング・セレモニーは20日13時半から、子安市民センター1（八王子駅から徒歩15分）で行われる。メンバーによるアトラクションは劇のほかには、バレエ太鼓、コーラスが披露される。カンパ500円（立食パーティー）。

相談など連絡は月一金曜9～17時に0426-6719645（FAXも）同事務所へ。18～22時は0426-65-5536多田さんへ。

（長田米子記者）

「ほっとスペース八王子」開所を
報じるアサヒタウンズの記事

ほっとスペース八王子「家族会」の結成を

「ほっとスペース八王子」呼びかけ人 運営委員長 植 松 恵 樹
賛助会代表 岡 口 雅 子
賛 同 代 表 堀 部 正
職 員 浜 光 宏
井 田 有 哉

会員のご家族の皆さん

「ほっとスペース八王子」は今年開設 10 周年を迎えます。現在のような、行政から A ランク（職員 3 人体制）の認可を受ける以前からですから、結成当時の中心メンバー、会員の皆さん、支援者の皆さんの苦労と努力は大変なものだったと思います。あらためて敬意を表したいと思います。

精神病患者として自分自身苦しみながら、

- 精神病患者に対する差別と偏見をなくす活動
- 「精神障害者」解放運動（精神病患者の自立など）の拠点を作る

ことを目的として、「ほっとスペース八王子」を作ったことは、まさに先見の明があり、まったく正しかったと思います。助成金や補助金が少なく、わずかの人件費の中で頑張った職員の方々、多大なカンパを寄せられた方々、会員の皆さんの支えがあり、現在の「ほっとスペース八王子」が存在しているのだとあらためて思います。そして、今後とも存続させ、より強固なものとしていかなければなりません。そのためにも、是非とも家族の皆様の協力は欠かせないものと思います。

作業所は、行政からは「精神病患者が社会復帰訓練をするための施設」と位置づけられています。職員も、プログラムなど（食事会、年間行事などを含め）を通じ、そのための努力をしているところです。若い会員は就労への意欲も強く、また年配の会員は食事作りなどを通して、自立生活をできるようにするなど、個々人に見合った取り組みが必要です。現在までも、スポーツの会や食事会などで多くのボランティアの方々に助けていただいているのが実情です。これらのプログラムをさらに実のあるものに結びつけていくには、「ほっとスペース八王子」内だけでは限界もあります。多くの時間を一緒に過ごすご家族、兄弟姉妹の方々のご協力も大事な部分だと思っています。

その意味でも、家族の方々には、まずプログラムなどを見学していただき、家族同士の横のつながりなどを作っていく中で、ゆるやかな「家族会」を作っていただきたいと思っています。月に一度でも結構ですので是非見学に来てください。そして、数ヶ月に一回でも家族の集まりを持っていただき、様々な話をしていく中で、付き合いを深めていただきたいと思います。その中で会員と家族との触れ合い方も情報交換し合う中から見出されてくるものと思います。

私たち運営委員会、賛助会、職員も最大限の協力をいたしますので、家族会作りの第一歩を踏み出していただくことを呼びかけたいと思います。



「ほっとスペース八王子」会則

第一章 総 則

第一条（会の名称）

この会は、「ほっとスペース八王子」と称する。

第二条（事務所）

この会は、事務所を、八王子市八幡町13-2 ふくしまやビル2階（電話 0426-28-2319）に置く。

第三条（目的）

この会は、「精神病患者」および回復した「精神病患者」が自らの手で、自らの生活を切り開き、享受するために必要なあらゆる活動を行うことを目的とする。

第四条（事業）

この会は、前条の目的のために、以下の活動を行う。

〈五つの活動〉

（三つの支柱）

- (1) 「精神病患者」に対する差別・偏見をなくす活動をする。
- (2) 「精神病患者」の権利を守り、擁護する活動を行う。
- (3) 「精神病患者」相互及び団体間の交流を行い、支援を広める為の活動を行う。

（二つの支柱）

- (4) 「精神病患者」リーダー後継者を育てる。
- (5) 「精神病患者」自身に関わる法律等に対して、労働組合や市民団体と連帯した取り組みを行う。
- (6) その他、前条の目的のために行う活動。

〈二つのセンター：「解放センター」の両輪〉

- (7) これらの活動をおこなう場として、
「自立生活センター」部門と
「オールタナティブ・センター」部門を両輪とする『「精神病患者」解放センター』を運営する。

第五条（会員）

この会の会員は、以下の通りとする。

- (1) 正 会 員 この会の趣旨に賛同した「精神病患者」および回復した「精神病患者」個人及びその団体で所定の入会金 1,000 円、年会費 3,000 円を納める者。この会の事業活動に参加する者。
- (2) 賛助会員 この会の趣旨に賛同した個人及び団体で、この会の運営を財政的に援助する者。事務局員（職員）は賛助会に加入することとする。
- (3) 退 会 年度末までに所定の更新手続きをしない会員は退会となる。退会された会員への年会費の払い戻しはしない。

第二章 組織及び役員

第六条（組織）

- (1) 会員の総会 前条に規定する会員の総会を、最高意思決定機関とする。
- (2) 運営委員会 総会の意思に基づいて、この会を総轄し、諸事業を調整するための最高執行機関とする。
- (3) 事 務 局 この会の運営を円滑にするため事務局を置く。
- (4) 事 業 部 この会の目的を遂行するため事業部を置く。

第七条（役員）

一、この会を運営するために次の役員を置く。

- (1) 代 表 一 名

- (2) 事務局長（所長） 一名
- (3) 運営委員長 一名
- (4) 運営委員 五名
- (5) 会 計 一名
- (6) 会計監査 一名
- (7) 顧 問 一名

二. 役員の構成は、「精神病者」および回復した「精神病者」の意思が重く反映するものでなければならない。

三. 役員は、総会の承認を以って決定される。

四. 役員の任期は一年とし、再任を妨げない。

第七条の二（役員の選任）

- (1) 代 表 原則としてプログラムに参加し、会の運営に責任を持てる会員の中から選挙で選ばれ、総会において承認される。
- (2) 運営委員 原則としてプログラムに参加し、会の運営に責任を持てる会員の中から選挙で選ばれ、総会において承認される。会の外部から依頼した運営委員については総会において承認されたものを運営委員とする。

第七条の三（役員の役割）

- (1) 代 表 会を代表し、会の事業を統括する。
- (2) 事務局長 総会、運営委員会、事業部の事務を統括する。
- (3) 運営委員長 「ほっとスペース八王子」の人事に責任を持ち、会全体の事業に責任を持つ。運営委員会を代表し、運営委員会を統括する。
- (4) 運営委員 会の予算、事業計画、会則などを編成し、監査する。
- (5) 会 計 会の予算に基づいて、予算の執行状況を把握する。
- (6) 会計監査 会の予算の執行状況を監査する。

第三章 会 議

第八条（総会）

総会は、年一回以上開催される。

二. 総会は、以下の事柄を決定する。

- (1) 役員の選出
- (2) 事業報告及び決算
- (3) 事業計画及び予算
- (4) 会則及びその改正

第九条（運営委員会）

一. 運営委員会は、月一回以上開催される。

二. 運営委員会は、以下の事柄を決定、承認する。

- (1) 総会で決定、承認された計画に基づいた具体的方針
- (2) 方針に基づいた執行と総括の報告

第十条（全体ミーティング）

全体ミーティングは、運営委員会の統括の下、随時開かれ、会員間の相互交流を深めながら、以下の事柄等を討議する。

- (1) その日に起きた問題点や会の運営について
- (2) 会計状況の把握。

第十一条（事務局・職員ミーティング）

総会、運営委員会の準備・記録整理、事業部の業務のために適宜開かれる。

第四章 財 政

第十二条（資産）

この会の資産は、以下のものによって構成される。

- (1) 会 費
- (2) 補助金
- (3) 助成金
- (4) 事業収入
- (5) 寄付金
- (6) その他

第十三条（管理）

資産は、運営委員会の議決を経て管理、経理し、毎月及び求めに応じて随時、運営委員会に報告する。

第十四条（監査）

会計監査が、年一回及び必要に応じて随時、監査を行い、その結果を総会及び運営委員会に報告する。

第十五条（経費）

この会の運営に関する経費は、第十二条に規定する資産から支弁する。

第十六条（会計年度）

会計年度は、毎年4月1日に始まり翌3月31日を以て終わる。

第五章 罰 則

第十七条（種類）

- (1) 退 会 謹慎を何度も繰り返し、会内の秩序を乱したり、会の運営を乱したり、会則や会の決まりごとを守らない会員に対して、本人の弁明を聞いた上で、運営委員会の決定で、退会を言い渡すことがある。著しく会の利益を損なう行為があった場合、謹慎処分の多少に関わらず、本人の弁明を聞いた上で、運営委員会の決定で、退会を言い渡すことがある。
- (2) 謹 慎 第十七条の二で規定する。
- (3) 注 意 第十七条の二で規定する条項に該当する場合、全体ミーティングさらに運営委員会で検討し、口頭ないし文書で注意することがある。

第十七条の二（注意）

一、会員の中でこの会則および以下の定めに違反したものについては、本人の弁明を聞いた上で、運営委員会の決定で、注意処分をすることがある。

- (1) 暴言をはかない。
- (2) 暴力を行使しない。
- (3) 金品の貸し借りをしない。
- (4) セクハラ発言、セクハラ行為をしない。セクハラガイドラインを設けて厳格に対処する。
- (5) その他、「ほっとスペース八王子」の会員として相応しくない行為。

二、（謹慎）

何度注意しても改まらない場合、本人の弁明を聞いた上で、運営委員会の決定で、謹慎処分をすることがある。謹慎の期間はその都度、運営委員会で決める。

三、（謹慎中の会員の権利・義務）

謹慎中の会員は総会に参加する権利はある。しかし、議決権は持たない。

四、（謹慎の解除）

謹慎の解除の手続きは、謹慎の期間が解けた時点で、当該会員と運営委員会との話し合いをもってする。

附 則

第一条（施行日）

この会則は、1996 年 4 月 20 日から施行する。

第二条（改正）

この会則は、総会の審議を経て改正することができる。

第三条（改正）

この会則は、1999 年 4 月 1 日に改正した。

第四条（改正）

この会則は、2001 年 4 月 1 日に改正した。

第五条（改正）

この会則は、2002 年 7 月 1 日に改正した。

第六条（改正）

この会則は、2003 年 4 月 1 日に改正した。

第七条（改正）

この会則は、2004 年 4 月 1 日に改正した。

第八条（改正）

この会則は、2004 年 10 月 25 日に改正した。

第九条（改正）

この会則は、2005 年 4 月 10 日に改正した。



ソフトバレーボール東京都大会でブロック優勝を決めて
(2003年11月20日千駄ヶ谷の東京体育館)

「ほっとスペース八王子」 年 表

年 月	「ほっとスペース八王子」の出来事	「精神病者」をめぐる動き
1950年5月		精神衛生法施行。朝鮮戦争勃発。自衛隊の前身・警察予備隊創設。
1952年4月		日本、アメリカと単独講和。沖縄がアメリカの施政権下に。安保条約が締結される。
1952年7月		破壊活動防止法施行。戦後初めて思想そのものを処罰する法律が施行される。
1954年3月		静岡県島田市で幼女誘拐殺害事件が発生。5月「精神障害者」赤堀政夫氏が差別を理由に不当逮捕（別件逮捕）される。
1958年5月		静岡地方裁判所、赤堀さんに死刑判決。
1960年2月		・東京高等裁判所、控訴棄却。同年12月最高裁判所、上告棄却。死刑判決確定。 ・安保条約改定。日本はますます戦争の準備を進める。
1961年8月～		4度にわたる再審（裁判のやり直し）請求。
1964年		米大使ライシャワー事件。「精神病者」の隔離収容主義が強まる。
1968年		栗岡病院（大阪）事件。
1969年		伊藤病院（千葉）事件。核抜き、基地抜き沖縄の日本への復帰運動に破壊活動防止法が適用。
1970年		「ルポ精神病棟」朝日新聞に連載される。十全会病院（京都）事件。日米安保条約自動延長。アメリカのベトナム侵略戦争が泥沼化する中で、日米間の軍事協力が強まる。
1971年		中村病院（福岡）事件。
1974年		水口病院（滋賀）事件。保安処分制度を新設した刑法改正（刑法改正草案）の動き始まる。
1976年	「八王子・赤堀さんと共に闘う会」（「ほっとスペース八王子」の前身）結成 毎年夏には仙台の赤堀さんに面会に行く。	島田事件第4次再審請求。秋田病院（徳島）事件。
1978年11月	「闘う蟻の会」（「ほっとスペース八王子」の前身）結成	大和川病院（大阪）事件

年 月	「ほっとスペース八王子」の出来事	「精神病者」をめぐる動き
1982年	「闘う蟻の会」の一部が「八王子・赤堀さんと共に闘う会」と合流。三里塚（成田空港建設反対）闘争への参加。	
1983年5月		島田事件第4次再審控訴審で東京高裁は静岡地裁への差し戻し決定。自治体労働者との連携で、精神衛生実態調査への反対運動広がる。
1984年	「八王子・赤堀さんと共に闘う会」三里塚闘争に反対同盟分裂後初の参加。	入院患者を虐殺していた宇都宮病院の実態が暴露される。
1985年	「八王子・赤堀さんと共に闘う会」三里塚闘争に会をあげて参加。一番激しいたたかいの時に参加して、「八王子・赤堀さんと共に闘う会」の会員はかなり鍛えられました。	
1986年	・「八王子・赤堀さんと共に闘う会」は静岡市に常駐者を置き、差し戻された第4次再審請求を受け入れて、裁判開始を要求して72日間のリレーハンストに八王子からも年明け早々参加。佐藤代表と安べも参加して二人で延べ1週間ハンストしました。でも静岡常駐の会員はリレーハンスト者の空きが出るとつなぐ為に、臨時にハンストをしていたので、かなり体力的に疲労が出てきました。 ・再審決定の直前から始まるまで、ほとんど毎月毎日のように八王子からマイクロバスで静岡まで集会や傍聴闘争に、この時まで集めた全ての財政、資金を使い切って参加。	同年5月30日静岡地方裁判所、島田事件再審開始を決定。
1987年	・再審が開始されるということで赤堀さんが仙台から静岡に移管される前の静岡支援センター結成集会での「八王子・赤堀さんと共に闘う会」代表の挨拶。ビデオ撮影班の仲間の母親が手縫いで縫ってくれた八王子・赤堀さんと共に闘う会の旗を手に参加。 ・こころの病をおして、再審裁判が開始される前から開始されて以降も欠かさず静岡地方裁判所に傍聴。その資金は各支援団体・個人の賜物。「ほっとスペース八王子」への支援団体・個人（賛助会）はその時以来の財産です。	精神保健法施行
1989年1月	・ヒロヒト天皇が危篤状態になって、「八王子・赤堀さんと共に闘う会」事務所、代表宅家宅搜索を受ける。 ・都職労民生局支部の各労組、八王子の労組活動家・支援者など八王子・赤堀さんと共に闘う会結成以来の大きな仲間の参加で歴史的な瞬間を共有した。4大冤罪事件の一つ、島田事件での死刑囚として苦しめられていた赤堀政夫氏の無罪判決の瞬間を。	ヒロヒト天皇病死。 1月31日赤堀さんに無罪判決。

年 月	「ほっとスペース八王子」の出来事	「精神病者」をめぐる動き
1989年1月	・事務所前に武装機動隊が装甲車で天皇の葬式が終わるまで常駐。	
1989年2月		赤堀さん無罪奪還される。「処遇困難者」専門病棟建設の検討始まる。
1989年8月	仙台刑務所の赤堀さんに面会に行った時に寄っていた大洗海水浴場に赤堀政夫氏が釈放されたこの年の夏に訪問。	
1990年1月	「八王子・赤堀さんと共に闘う会」代表がイギリス留学。「八王子・赤堀さんと共に闘う会」再編過程に入る。	
1990年9月頃	「八王子・赤堀さんと共に闘う会」、三多摩・刑法改悪、保安処分反対実行委員会と共闘関係を結ぶ。	
1991年		湾岸戦争。PKO法制定の動き強まる。
1992年		PKO法が制定され、海上自衛隊がペルシャ湾に派兵。
1993年2月	「八王子・赤堀さんと共に闘う会」の仲間と「ほっとスペース八王子」の準備始まる。	
1993年～	・「ほっとスペース八王子」、毎月レクレーションを中心にした活動を始め。 ・夏の北富士キャンプ。奥多摩の紅葉狩り	障害者基本法制定。
1994年2月頃から	「ほっとスペース八王子」、東京都、八王子市と作業所開設の為の交渉に入る。	
1994年5月	「ほっとスペース八王子」ボーリング大会。	
1994年8月	「ほっとスペース八王子」の北富士キャンプ。この時、スパイスをふんだんに使った安べーがああ伝説になった超激辛スーパーカレーを作製。	
1995年3月	「ほっとスペース八王子」の事務所、自己資金で西八王子駅南の台町に開所。	「ほっとスペース八王子」としては反対の「精神保健福祉手帳」制度が盛り込まれた「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」制定。
1995年5月	・「ほっとスペース八王子」のオープニング・セレモニ、朝日新聞などから取材を受ける。 ・オープンしてすぐの料理教室。会員がどっと増える。この中の仲間が10月には自殺された。	
1995年7月	「八王子・赤堀さんと共に闘う会」の仲間が入院先で死亡。	

年 月	「ほっとスペース八王子」の出来事	「精神病者」をめぐる動き
1995年8月	・「ほっとスペース八王子」の夏キャンプ。 ・まだ助成金を受けていなかったの、参加費もかなり高く、またあまり綺麗などころへは行けなかった。	
1995年10月	・「ほっとスペース八王子」に東京都社会福祉振興財団が助成金拠出決定 ・「ほっとスペース八王子」の設立総会開催。	
1996年1月		障害者プラン、地域精神保健福祉施策。
1996年4月	「ほっとスペース八王子」、東京都と八王子市から助成金拠出決定。「精神障害者」共同作業所（Cランク、1名の専従職員・小規模作業所）としてスタート。	
1996年8月	・「ほっとスペース八王子」が共同作業所として初めての夏キャンプ。 ・いままでのように参加費も高くなって済むようになった。	
1997年4月	・共同作業所として助成金が入ることになって2年目、お祝いの花見会。でも、桜はまだ咲いていなかった。 ・「ほっとスペース八王子」、Bランク（2名の専従職員体制）に。	
1997年4月～7月	「ほっとスペース八王子」で誕生したカップルが次々と結婚。	
1997年5月	「ほっとスペース八王子」の力強い仲間・乙津氏が結婚を直前に急死。	
1997年8月	・「ほっとスペース八王子」と地域の労働組合との合同夏キャンプ。 ・外国人労働者との交流も。	
1997年12月	・「ほっとスペース八王子」の最初のクリスマス。 ・この年にはカップルが沢山出来たので、若い仲間も沢山参加。	精神保健福祉法公布。
1998年3月	都内の患者会と研修交流の企画第一回目。	
1998年4月		精神保健福祉士法施行。
1998年10月	地域の労働組合との交流芋煮会なども企画第2回目。	
1999年3月	都内の患者会と研修交流の企画第二回目。これをきっかけに「東京『病者』地域hotライン」が作られる。	
1999年4月	「ほっとスペース八王子」、Aランク（3名専従職員態勢）に。現在の八幡町に移動。	

年 月	「ほっとスペース八王子」の出来事	「精神病患者」をめぐる動き
1999年5月	「ほっとスペース八王子」の設立時以来の会員自殺。	
2000年11月	「ほっとスペース八王子」ではじめての「健常者」専従職員採用。	
2001年4月	専従職員「精神病患者」1名「健常者」2名態勢で再出発。	移送制度の新設など、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」の強制入院制度の改悪・強化が進む。また「精神病患者」の犯罪を大きく報道して、触法「精神病患者」を対象にした新法制定の動き強まる。
2001年9月	北海道研修旅行	
2001年12月	「ほっとスペース八王子」初代代表が勇退。	同時多発テロ以降、アメリカのアフガン戦争など、世界全体がきな臭さを増す。PKO法改悪。武器使用の緩和盛り込まれる。海上自衛隊のインド洋への派兵。
2002年1月	なんたまの会・卓球大会優勝	「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律案」国会上程。
2002年6月	関東地区ソフトバレーボール大会優勝	「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律案」強行採決。
2002年9月	広島研修旅行 で「がんばネット」とのふれあい。	
2002年11月	「よさこいピック高知」全国大会で堂々の銅メダル。	
2003年6月		「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律案」強行採決。
2003年9月	沖縄研修旅行	
2003年11月	「わかふじ大会」全国大会でみごと銀メダル。	
2004年10月		社会保障審議会において「今後の障害保健福祉施策について（改革のグランドデザイン案）」発表。
2005年2月		「障害者自立支援法案」国会上程。
2005年7月	愛知万博研修旅行	・「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」施行。同月初適用。（福島地裁） ・「障害者自立支援法案」衆議院強行採決。参議院へ。
2005年8月		・「障害者自立支援法案」廃案。 ・尾辻厚労相は10日の記者会見で障害者自立支援法案について、再提出する意向を表明。

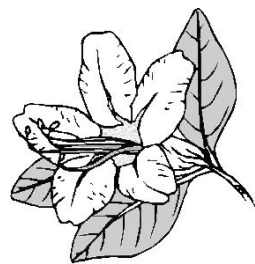
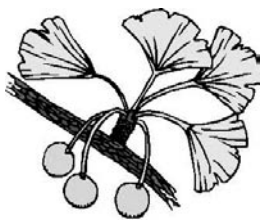
あ と が き

ほっとスペース八王子 代表 堀 部 正

10周年記念誌の依頼をさせていただいたところ、大勢の方々から貴重な文章が寄せられ、記念誌編集委員はじめ会員一同うれしい悲鳴でした。「ほっとスペース八王子」の今後の10年、そして20年を八王子・三多摩の「精神病患者」仲間の生活が成り立つように、更に「ほっとスペース八王子」を発展させなさいよ、精進しなさいよ、というエールとして受け止めて、設立時の初心を忘れずに決意を固めて行きたいと思います。ややもすれば楽な方向への誘惑がありますが、今の政府の「障害者」政策などを見る限り楽な方向には進めません。

さらに、やり残している多くの課題を、今いる会員、運営委員ともども私たちが居る現在地点を足がかりに、着実に実現していける方向で前に進んで行きたいと思っています。

最後になりましたが、寄稿者の皆さん、この10年間ご支援・ご協力してくださった全ての皆様に、この誌上で御礼申し上げます。今後とも宜しく願います。



編集後記

● 原稿をお寄せいただいた皆様、ありがとうございました。実務を担当されたみなさん、ご苦労様でした。ようやく出来たという感じです。「ほっとスペース八王子」は内部的にも色々問題をかかえています、すべての原稿を読ませていただいて、「大丈夫、これからもやっていける」との確信を持ちました。すべての皆様のご支援、ご協力を今後ともお願い致します。(植松)

● 井田さんから編集作業を途中で引継ぎ、休日返上で突貫工事をやりましたが、皆さんからのたくさんの原稿に嬉しい悲鳴で、ひいひい言いながらどうにかこうにかできあがりました。原稿をお寄せいただいた皆様、本当にありがとうございました。(浜)

● お忙しい中にもかかわらず、記念誌の原稿記事を寄せて頂いた皆様、有難うございました。皆様の原稿をパソコンに打ち込みながら、「ほっとスペース八王子」の歴史や、精神障害者解放運動について、考え、学ぶことができました。自分にとって、とてもよい機会だったように思います。次回、記念誌を発行するまでには、編集作業もできるよう努力したいと思います。本当に多くのメッセージを寄せて頂きまして、誠に有難うございました。(井田)

「えっ!? まだ10年?」

－患者会運動の歩み－

発行日 2005年9月25日

編集者 「ほっとスペース八王子」10周年記念誌編集委員会

編集協力 多摩一般労働組合「ほっとスペース八王子」支部

発行者 植松恵樹

発行所 ほっとスペース八王子

〒192-0053 東京都八王子市八幡町13-2 ふくしまやビル2階

TEL (042) 628-2319(代) FAX (042) 620-2786

印刷所 社会福祉法人 東京コロニー コロニー東村山印刷所

〒189-0001 東京都東村山市秋津町2丁目22-9

TEL (042) 394-1111(代) FAX (042) 394-1052

